

---

# 世界の窓が全開ですよ

雨月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界の窓が全開ですよ

### 【Nコード】

N2225Y

### 【作者名】

雨月

### 【あらすじ】

彼の名前は新戸風太郎。探せば世界に三人ぐらいは似ている人がいるといわれる高校二年生の生徒会長である。二学期の初日、彼は久々に友人に出会った。

## 第一話：一陣の風

### 第一話

俺の名前は新戸風太郎。羽津高校に通う高校二年生である。実年齢と彼女いない歴が一緒という世間一般的な男子生徒だと自分では思うわけだ。いや、もしかしたら全校生徒中の約半数が心のどこかで俺の事を好きかもしれないと言う確率は無きにしも非ず……まあ、こんな情けない感じだが、一応生徒会長をしているのだ。

今日から高校二年生二学期が始まる。中だるみにならないようにしろとのお達しが夏休み前に先生から出ていたものだが、勉強合宿やらなんやらで俺の夏休みは一カ月もなかった。

「おつかしいなあ」

いつもポストに入っているはずの手紙が今日は来ていなかった。他の郵便物は来ているから郵便配達のおっさんが遅れていると言うわけでもないはずである。まあ、目的の物が入っていないのならそれはそれで構わない。文通相手への返事が面倒だからである。

ちょっと心配になりつつも、俺は学校へと行くことにした。

二学期一発目という事もあり半日で学校は終了。生徒会も明日からだし、今日は遊んで帰ろうかしらと下駄箱を乱暴に開けてみた。

「あん？」

靴の上に一通の手紙が置かれている。

『拝啓、新戸風太郎様。本日の放課後、生徒会室にて待っています。』

女の子らしい文字、俺は念のため鼻を近づける。

「くんくん……女の子の匂いだな。きつと俺の事を生まれる前から好きだったに違いない。男の匂いは一切しないしクラスの連中の仕業でもなさそうだ」

俺にもね、好きな人の一人や二人はいるものさ。でもなあ、一人はこの高校にいればかり思っていたら海外に行って行方知れずだ

し、もう一人は転校してしまっただよ。思いも伝えられないへたれ野郎と罵るがいいさ。

さて、それはそれ、これはこれである。女の子を待たせるのは古来より悪いものだと俺は親父に教わっている。近くの男子トイレへ入って寝癖を一生懸命押しつける。第一印象がよいように身だしなみチェックを怠ってはいけない。

「……………寝癖があるのはぐっすり眠れたって事だ」

去年から使用している生徒会室へと足を向ける。『男の園』と呼ばれし俺の牙城はその名の通り全員男子生徒（イケメン、体育会系、文系、理系、なんちゃってチャラ男等）で構成されている為副生徒会長、あるいは書記長の女子と淡い恋物語を想像していた俺はショックだ。

「あ、あの、生徒会長……………私、生徒会長の事が好きで生徒会に入っただんです。副生徒会長、がんばりますっ」

しつこいが、こんな甘い展開は一切ない。副生徒会長も友人の男子生徒でがっかりである。

もう少して生徒会室と言うところで副生徒会長に出会った。

「新戸君ではないですか。遅かったですね」

眼鏡の秀才、中州秀作が俺を見上げるようにして首をかしげる。

「中州、お前まだ帰ってなかったのか？」

「ええ、ちょうど新戸君を呼びに行ってから帰るつもりでした」

「俺を呼ぶ？先生か？校長か？はたまた写真撮っていたのがばれたソフト部の部長にか？」

いい尻だった。今度はテニス部にカメラを持って行こうかなと思う。

「いえ、手紙を渡していると言っていたのですがもらっていないのですか？」

「ああ、手紙ならもらった」

俺がそう言っ手紙を見せる。それに触ろうとしたものだから齒をむき出して威嚇すると意外そんな顔をして手を引っ込めた。その

後、中州は一度頷いて手を振ってくる。

「それなら話は早いですね。僕はもう会ってきましたから失礼します」

「気を付けて帰れよ」

「ええ、気を付けて帰ります」

中州が廊下の角に消えてそこで首をかしげてしまった。

「ん？あつてきた……ってどういうことだ？」

まさか、俺にラブレターを渡してくれた相手は中州の方にも同じようなラブレターを？いや、しかし、中州には許嫁という古臭くも一度はあこがれるような相手（母親に確認したところ、俺には許嫁はいなかった）がいるから大丈夫だろう。

いや、待てよ？そういえば今日の朝、手紙が来てなかったな。そして、放課後手紙が来た。

改めて手紙を見てみる。

「……………まさか、な」

頭の中にぼっくり浮かんでいた一つの可能性を即座に打ち消し、それでも時間を確認する。

「……………あたっていたとしたらそろそろ許容範囲ぎりぎりか」

時間につるさい相手の為廊下を走り、急いで生徒会室前へ。その前で俺はもう一度身だしなみをチェックしてオーケーを出す。

軽く扉を開けると、当然ながら生徒会委員は一人もいない。

だが、一人の比較的小さな女子生徒が立って俺を迎えてくれた。

「新戸生徒会長、お久しぶりです」

きつと、今の俺の顔を見たら誰もが『まるでアヒルだった』と言ってくれるだろう。そうさ、俺はいつだって醜いアヒルの子。

## 第一話：一陣の風（後書き）

チャック全開ですよ、とはまた違う話です。続編じゃないですね、はい。本来は一つの作品にまとめられるべき話だったのですが、諸事情によりあちらは生徒会長の話でまとめた（つもり）ということになっていきます。前作が微妙だったのでこちらはそれなりに頑張ろうと思います。

## 第二話：マイフレンド

### 第二話

男の牙城、女子生徒たちからは の穴と呼ばれている生徒会室に少し身長の高い女子生徒が立っていた。

「倉山千穂……」

ついフルネームを口にしてしまう。

「お久しぶりです」

少々、相手も緊張しているようだっただ。

俺が中学の生徒会長だった頃、千穂は副生徒会長だった。ちなみに中州は書記長である。

俺が黙っていると千穂は首をかしげた。

「もしかして身体の具合でも悪いのですか？」

「そんなわけないだろ。久しぶりにあったから驚いているだけだよ」  
「そうですか。それなら問題ないですね。椅子があるので新戸先輩、座ってください」

此処は俺の牙城のはずである…はずなんだけどなあ。有無言わさない口調だからしょうがない。ここで嫌だとか否定的な態度を取ると面倒な事が起こる。

千穂の対面に座り、俺はため息をついた。

「やはり、高校の生徒会長というものは中学の生徒会長よりも大変なのですね」

「え？」

「ため息が出ていたのでそう思いました」

「あ、ああ……まあ、そんなもんだ」

まさか千穂がいたから…なんて言えないな。

「それで、お前なんでここににいるんだよ？ああ、もしかしてまだ夏休みだから会いに来てくれたのか？」

「いえ、違います」

もうさ、この時点で鈍くない俺はなんで此処にいるのか気付いていたよ。でも、認めたくないって言う気持ちの方が大きいよ。

「あゝじゃああれだな。こっちの近くにたまたま寄っただけか？そうなんだろう？」

「いえ、こちらにまた引越してきたのです」

ほーらね、やっぱりだ。俺の嫌な予感って言うのは素っ裸で警察署に行ったら捕まるのと同じくらいの確率で当たる。

「あ、あゝ……そうなのか」

「ええ、そうです」

「そうか……」

俺の対応に千穂は首をかしげていた。

「……私はこうしてまた新戸先輩や中州先輩に会えたりした事が嬉しいのですが新戸先輩はそうではないのですか？」

「ああいやいや、嬉しいぞ、うん、嬉しいけど気持ちの整理が出来ていないからちょっと驚きの方が大きいだけだ。ところで、家の方はまた前と同じ場所なのか？」

中学校の隣に家があった。夕飯に呼ばれる事も稀にあったが、千穂の親もちよつと相手したくない部類ではある。

「いえ、違います」

「もしかして高校の隣か？」

それならまあ、千穂らしいと言えるんだけどな……

「いえ、新戸先輩の家の隣です」

もし、俺の家の隣なんて言われた日には……

「あれ、悪い、聞きとれなかったからもう一度教えてくれないか？」

「はい、新戸先輩の家の隣に引越してきました」

きつと、俺の前世は神と敵対していたのだろう。だから、神様は俺に対してこつても悪い状況をセッティングしてくるのだ。そういえば昨日の深夜に隣に車が止まったような気がしなくてもなかったかなあ。

「そ、そうか……あ、じゃあとりあえず帰るか？」



「はい」

その日の夕方、俺の家に倉山家が挨拶にやってきた。

「お隣に引っ越してきた倉山です」

「御無沙汰してます」

「こちらに帰っていらしたんですね」

両親が懐かしそうに話しこんでいる中、俺は隣で固まっている愛夏を見てそっと肩に手を置いた。ちなみに、愛夏は俺の妹ではない。親戚で、俺の妹分みたいなものだ。世界一周に両親が旅だった為、こちらに居候している。

「あ、兄貴…倉山って…」

「ああ、お前の想像している通りだ」

「よ、よかったねー、兄貴。お目付け役がいなくて寂しかったんじゃないの？」

「ははあ、俺だけじゃなくてお前のお目付け役って感じもするんだよなあ」

「風太郎君、久しぶりだね。ちょっと話をしようじゃないか」

「あ、はい」

千穂父に呼ばれて俺は前へと移動する。愛夏はすぐに引っ込んだ。「今度ぜひ、夕飯と一緒に食べようじゃないか」

「はい……近いうちに必ず……」

「ああ、千穂の事をよろしく頼むよ」

「え、ええそれはもちろんです」

受け答えが面倒だから呼ばれたくないんだけど、いずれまた呼ばれるんだろうな。

でもまあ、宿命ってやつなのか俺が呼ばれたのは次の日だったりする。

### 第三話：さわり

#### 第三話

「ほらー、朝だよつ。もうつ、あたしがいないと朝も起きれないんじゃない以外に婿の貰いていないんじゃないの？」

なんて事は絶対に起こり得ない。いや、人によっては起こりえるらしいのだが、俺にとっては妄想の産物でしかない。重ねて言うが、人によっては起こりえるらしい。大切なことなので二回言いました。現実にはまあ、女の子が一応起こしに来てくれるからそれだけ見るならいいほうかもしれない。

「新戸先輩、愛夏さん、朝ですよ」

ちなみに、起こしてもらいたい女性像は『立派な年上の女性』である。真面目だが、どこことなく小生意気なところのある年下の女の子ではない。起こすときにピンポイントで日光を目に当ててくるような少女ではないのだつ。

「…眠い」

「兄貴、しょうがないよ。起きよう」

「……わかった。二人ともおはよう」

「おはようございます」

「おはよう」

かすかに残る眠気を昼過ぎまで脳内にとどめておくとしよう。爽やかな朝を迎えることなんて九月じゃ無理だろ。残暑の中目を覚ますなんて暑くて仕方がないんだよ。

「新戸先輩、シャツです」

「おう」

俺は起きてすぐに顔を洗い、歯を磨き、朝食をとったあとに着替え、トイレに行ってレッツラゴーというスタイルを取っている。でもまあ、可愛い後輩がシャツを出してきたのなら最初に着替えると言うのもいいかもしれないな。

べたつくパジャマの上を脱いでシャツを着る。

「兄貴、ズボンだよ」

「あいよ」

可愛い妹分がズボンを持ってきたのなら履くしかないだろう。俺はパジャマの下を脱ごうとして四つのおめめへと注意を向ける。

「何だその期待した目は？」

「別に何も」

「期待なんてしてないよ」

「そうかい、それならいい」

さつさとズボンを履く。二人の視線が俺に新たな趣味を誕生させるかもとちよつとばかり脳裏をよぎる。しかし、あくまで自分がノーマルであると言う事を教えさせられた。

朝のこまごまとした事を終えて登校。俺と愛夏、そして千穂が三人並んで学校へと足を進める。

「愛夏さんが新戸先輩の家に居候しているとは知りませんでした」

「ああ、愛夏の両親が世界一周旅行に行っちまって帰って来ないからな。連絡もつかない相手だし、今頃どこを彷徨っているんだろうか」

「この前はカンボジア辺りから手紙が来てたような気がするけどどうだろう」

娘の事をほっぽりだして世界一周だから性質が悪い。愛夏が気にしていないようだからいいものを、もしもぐれたりしたらどうするつもりなんだろうか……まあ、その程度でくれるというのも変な話ではあるか。

「寝室は新戸先輩と同じなのですね」

「そだよー、だって寝る場所がないから仕方ないもん。居候が部屋を要求したらまずいでしょ？」

「確かにそうですね。でも……」

何かしら言葉を続けようとした千穂が前を向いて固まった。

「ん、どうした？」

「あれ」

「え？あれ？」

指差す方向を俺と愛夏も見る。赤いシートのようなものが民家の玄関から出てきて前に止まっている高級そうな車の後部座席まで続く。

「お嬢様、月一の車登校でございます」

「間山さん、ありがとう」

黒髪縦ロールの女の子が一人、家から出てきて一瞬だけ俺たちの事を見た。

「ふんっ」

そういつてそのまま車に乗り込み、車は去っていく。

「あれは……何ですか？」

「高級車だろ」

「偽物っぽいお譲さまも付属していたね」

考えたところでしょうがないので俺は歩き出した。

「兄貴、気にならないの？」

「いや、別に。制服みたところ俺達と同じ高校じゃないみたいだしなあ。転校生が来るって言うのも聞いていないから遠い高校だろ」

「そうですね」

もはや興味はないといった様子で千穂も俺の隣にやってきた。

「新戸先輩」

「何だよ」

「今日の昼休み、先生に頼んでみますのでその時はよろしくお願いします」

「いまいち理解できなかった。」

「何の事だよ？」

「生徒会の事です。詳しい事は昼休みの時に話しますので……愛夏さんもどうですか？」

「え、遠慮しておくよ」

若干笑顔がひきつっている。

ふーむ、そうか、千穂は生徒会に入りたいのか。その時はよろしく  
お願いしますって、別に生徒会長が絶対的な権利を持っているわけ  
でもないんだけどな。漫画やドラマに出てくるような生徒会長なん  
て殆どいない。自発的に行動する人なら先生に無理を言えば何とか  
なるだろう。生憎、俺はそんな生徒会長じゃないからな。

千穂の期待する視線が何を期待しているものなのか、俺にはいま  
いちわからなかった。

### 第三話・さわり（後書き）

全体投稿数としては前作と同じくらいまでいけたらいいですね。  
ま、行かないなら行かないで構いませんがそれなりにがんばります。  
前回はほぼ毎日更新してきました。ですが、今作では無理っぽいで  
す。

## 第四話：仲の良い二人

### 第四話

午前中の授業が終わったなら何が待ち受けているのか……当然、昼休みである。弁当学生は弁当を、食堂学生は定食を、購買学生はパンを奪い合って腹を満たすのだ。

俺は弁当学生の為に机をくつつけて友人たちと一緒に弁当をつつく。

「なあ、ジュディー」

「ん？どーしたの？」

金髪碧眼、美人でスタイル抜群の全男子憧れの的……中州ジュディーに質問することにした。

「毎日中州の弁当作ってるけどやっぱり大変か？」

「ん？そうね、結構大変だけど将来を誓った秀作の為だもの。苦も楽になるわ」

「ありがとう、ジュディー」

隣にいる中州が頬を染める。男子生徒の間からは『ちつ、ブツ飛ばすぞ』や『中州秀作が浮気して刺されますように』といった穏やかではない言葉が飛びかっている。

「ふうたろーにはお弁当を作ってくれるような娘、いないの？」

憐れむように、と思うのは俺の心が見せる幻影なのだろう。でもどこか、『どう？ 私たちはとても幸せなの』といったオーラを出している気がする。

「ん？愛夏が頑張って作ろうとするんだけどな。俺が作ったほうがうまいから駄目だ」

下手ではない、下手ではないが……自分で作ったほうがコスト面、タイム、見栄え等々、いいのである。

「そつえば愛夏ちゃんのお弁当を作っているのは新戸君でしたっけ？」

「ああ、うちの母ちゃん今は朝が早いからな。必然的に自分の弁当も自作だ。あー、クラスのアイドル的な子が俺の為に弁当とかつくってきてくれねえかなー」

俺のこの言葉を聞いた男子連中がまた何か言っているようだ……『それはないでござる』『中州秀作が浮気して刺される確率よりひどいでござるよ』……お前ら、後で覚えておけよ。

弁当を食べ終えたところで放送が鳴りだした。

『二年A組、新戸風太郎君。職員室まで来なさい……繰り返します……』

ああ、そういえば呼ばれていたんだっけか。

「会長、女の子が来てますよ」

「女の子？」

渡りに船とはこのことだ。グッドタイミングで呼んでくれるとは……このままかけおちでもしようかしら。

心を弾ませながら教室の後ろの方を見ると千穂が立っていた。手の早い男子達数名が千穂の周りに群がる。

「ねえ、君何年生でござる？一年生でござるか？」

「お金あげるから拙者と遊ばないでござるか？」

「お前ら何気持ちの悪い事してるんだよ。ほら、散れっ」

男子を蹴散らし、千穂の前にやってくる。

「どうしたんだ？」

「どうした、ではありません。お昼休みお願いしていたではありませんか」

怒っているようだ。さっきまで千穂の周りにいた男子達も『あの会長に楯突くような女の子は遠慮しておくでござる』といって席についている。

「悪かった」

「……早く行きましょう。先生も待っていますから」

ジュディー達に身振りで行ってくるわと伝えて教室を後にする。

「ふつたるーは『このまま海に行つて来る』ってジェスチャーしたに違いないわ」



「いや、違いますよ。きつと『このまま峠を攻めてくる』でしょう」  
俺らの心はいつも一つにつながっている……はずだ。

職員室へ行く途中トイレに寄った。千穂を待たせる為、手早く廊下に戻つてくると千穂がいきなり手を伸ばしたきた。

「チャックが開いてます」

「言ってくれば俺が自分でするっての」

こんなところ他の生徒に見られたら馬鹿って思われてしまう。

「あ……」

「ん？どうした？」

「布が噛んでしまいました」

チャックが全部上がりきることなく、途中で止まってしまっている。千穂は膝立ちになって噛んだ布を外そうとしていた。

「おい、これはまずいって。俺がやるから離れてくれよっ」

「いえ、私の失敗ですから」

失敗したら絶対に自分の力で何とかしようとするその責任感……残念ながら今は要らないんだ。中学生のときだって全く同じことがあったのにまたやるとは成長していない証なのではないだろうか。

「せ、生徒会長があんなことさせるなんて……」

「うわ、こんなところで？あり得ないっ」

ああ、ほら、俺に幻滅した女子生徒たちが去って行っちゃったじゃないかっ。

「終わりました」

「……………ありがとよ」

下手したら次の校内新聞は『あの生徒会長が下級生に対してな事を……』とかやってくれそうである。新聞部の部長は可愛いんだが、そういうたネタが大好きだからな。普通に『無念！野球部初戦帰還』とかやってほしいものだ。まあ、ガードが緩いからいくら写真でもつけさせてもらったけど。

「では行きましょうか」

「おう」

他にハプニングが起こることなく、無事に職員室までたどり着く。身なりを整え、職員室の扉をスライドさせる。

「失礼します」

「やっと来たか。お前にしては遅かったな？」

「すみません、途中トイレに寄っていたので遅くなりました」

俺を呼び出した教師のところまで千穂を伴い歩いて行く。

「それで用事とは何でしょうか？」

「うん、実はお前の隣にいる倉山千穂さんが生徒会に入りたいそうなんだ」

「…なるほど」

千穂はお願いしますとばかりに頭を下げている……俺ではなく、先生に。

「こっちは別に生徒会に入れてあげてもいいとは思うんだがな。生徒会長はお前だ。入れる、入れないにしてもしつかりとした理由を聞きたい」

「ぼく個人としての意見は入ってもらって構わないと思います。中学生のころから倉山千穂さんは優秀でしたからね……ですが、転校してきて間もない状態で彼女が生徒会の活動に参加するのも如何なものかと思います」

「何故だ？」

なるべく千穂の方は見ないようにしておいた。

「文化祭の準備がそろそろ始まります。放課後、せっかく友人と仲良くなるチャンスを生徒会に呼ばれて潰してしまうと言うのも勿体ないものです」

先生は顎に手を当てて考え込んでいる。

「じゃあ駄目と言う事か？」

「ええ、生徒会には入れないほうが彼女の為になるでしょう」

「納得できませんっ」

両手をグーにして俺を睨みつけてくる。

「まあ、倉山千穂さん怒らないで下さい。まだ話は済んでいません

から」

「？」

ちゃんとさっきの言葉に続けようとしたセリフを口にする。

「生徒会には入れられませんが、ぼくが一個人として彼女に手伝ってもらおうと思います。それなら倉山千穂さんが友人と遊びに行くときなどは自由ですからね」

「そうか、回りくどい感じがするがお前がそういうのなら好きにするといい」

「新戸生徒会長、よろしくお願いします」

「はい、こちらこそよろしくお願いします。倉山千穂さん、一緒にいい高校にしましょう」

モテるイケメン生徒会長になりたいものだ。ということでもまずは丁寧な感じを与える口調から入ってみている。

一瞬、そう、ほんの一瞬だけ千穂が普段とは違う『憧れの先輩で嬉しい』みたいな表情をしてくれたのが嬉しかった。

「これでぼくは失礼します」

「ああ、待て。お前を呼んだのはその為だけじゃない」

先生は机の引き出しから一冊の冊子を取り出し、俺に渡したのだ。つた。

#### 第四話：仲の良い二人（後書き）

いまいち面白くないというのはなんとなくわかります。前作も読んでくれている人があまりいませんでしたからね。まあ、タイトル、内容等で見切りをつける人もいるんでしょう。読者がすべてというわけではないですけどね。書く側としてはそれなりに意見もらった方がうれしかったりするのです。辛口？駄目だし？下手すると感想読んで数日はへこんだりしていますけどね。昔はよく他の作者さんと駄目な部分を教えてもらったり等の交流があったものですが、今ではさっぱりです。忙しいというのもありますが…。今回の話の後は数日生徒会室での倉山千穂の仕事ぶりのつもりでしたが話変更で主題となる文化祭の話に移行します。

## 第五話：しばり

### 第五話

放課後、今日の晩御飯は千穂の家で御相伴にあずかることになっている。しかし、その前にファミレスに行かなくてはいけない。

先生からもらった冊子には『文化祭連携案』と書かれていた。なんでも近所の女子高がこの高校と文化祭について話し合いたいとのことである。えへへ……女子高かあ……。

「さーて、女の子と会ってきますかね」

まあ、残念ながら千穂も一緒の為に変な真似は許されないがな。千穂が自ら先生にお願いし、書記として同伴することである。

廊下に出ると既に千穂が待っていた。あれほど昼休み千穂に群がっていた男子どもは千穂の事をまるで見えていないかのように避けていたりする。

「行きましようか」

「そうだな」

ファミレスまでそんなにかからないからな。道中、変な人に会ったりハプニングも起きなかった。

相手が来ていないようなので適当な席に座って待つことにする。

「女子高とのことですが」

「それがどうかしたのか？」

「いえ、中学生の頃の新戸先輩とは変わっているようですので何も心配することはないと思います」

「はは、当然だろ。俺は変わったんだよ」

変わってないさ。ええ、変わっていませんとも。可愛い女の子がいたらそりゃ、誰だって胸がときめきますとも。心のどこかでああ、この子と仲良くなりたいなあとかで……ぐえへっへっへ……。

ま、愚痴るわけじゃないんだが高校はいつでも俺に告白してくるような相手は当然おらず、たまに話題に出る『誰が好き？』という

ようなことも俺が答える前に『新戸には中学時代に』って感じていないはずの千穂が俺の彼女に勝手になっていたりする。一時期は千穂が俺の隣にいたとか言う噂が広がったりもした。

「新戸先輩が成長したとなると少し……寂しいです」

「なんでだよ」

「知っているはずの先輩が少し遠くに行ってしまったような気がしたので」

「お前切ない事言うねえ」

転校して少しは成長したのだろうか。昔は愛想のかけらも滅多に見せないような奴だったのにな。中学生のくせにやたら大人ぶっていた。

「もう少し真面目にやってください」

「生徒会長ですから模範的な態度をとってください」

「しっかりしてください」

ちよつと冗談で後ろから胸揉んでやったら大声で泣き出すし……  
本当、あの時は対処するのが大変だったぜ。

俺が思い出に浸っていると千穂の声が聞こえてくる。

「文通の事です」

「今度はそれか？どうしたんだよ」

「最初の方はちゃんとした文章を返してくれていたようですけど……途中から徐々に字が雑になり、内容も薄くなってきたような気がしました」

千穂には悪いが忙しかったのだ。しかし、びっしりと書かれた文字を読んでそれにいちいち返していくのも大変なのだ。段々文章の量も増えていったし、俺の文章は最初と同じぐらいのはずなんだけど……思った以上に千穂が沈んでいるように見えたので謝っておくことにした。

「あ、ああ……悪いな」

「最後の方は絵を描いてごまかしている感じがしました」

結構頑張って描いたほうである。しかし、お気に召さなかったら

しい。勝手に描いたら莫大な著作権料を払う羽目になる危険な香りのする黒いネズミとか、勇気と愛だけが友達のあれとか…他にも色々描いたんだぜ？

「はつきりいいいますが私と文通するのは…嫌でしたか」

俺は首を縦に動かした。

「……そうですか」

あからさまに落胆しているようだ。

「そうだな。出来れば電話の方が俺はよかったよ。直接声聞けるし。ま、今はこうやってまた同じ高校に通っているんだからそれでいいだろ」

「相変わらず意地が悪いんですね」

「千穂がさつき『少し寂しい』とか言うからだよ。不満か？」

「……不満ですが、私も今はそれでいいです」

ぶすつとした感じで千穂は外の景色を眺めていた。

「……新戸先輩、来たようです」

「お、そうか」

千穂のしている景色を見ると……黒塗りの車が一台、駐車場でバックしていた。

## 第六話：来てほしい春

### 第六話

「いらつしゃいませ」

店員がマニュアル通りの声かけをする。ファミレスに入ってきたのは二人の少女と一人の老紳士。

一人目、黒髪縦ロールでスタイル抜群の高飛車そうな女子生徒。二人目、少しトロンとした目つきで、ちょっとぼっちゃりした感じの女の子……こっちも結構胸があって見ていて和む。三人目はオルバツクの銀髪に細面の初老の男性である。

これで掴みはばっちりとか何とか話しながらこちらの方へと歩いてきた。

「羽津高校の生徒さんですわね？」

「ええ、そうです」

否定するわけにもいかないので素直に頷いておいた。女子生徒二人が俺たちの席の前に座り、初老の男性は別の席で待機していたりする。

「はじめまして……わたくし、第一東羽津女子学園高校の生徒会長、大久保紗枝ですわ」

「東校の書記長である湯河原美穂です」

俺は衝撃を受けた。『ですわ』口調とかこれまで生きてきた中で聞いた事のない語尾である。『つす』とか『でやんす』は中学校の頃マジでいたからな……まあ、女子の知り合いがあまりいなかったから『ですわ』口調は聞けなかっただけかもしれない。

衝撃を受けている俺の代わりに千穂が自己紹介をしていた。

「羽津高校生徒会の倉山千穂です……新戸先輩、自己紹介お願いします」

「え、ああ……。羽津高校生徒会長、二年A組新戸風太郎です」

自己紹介を終えて俺は早速本題に入ることにした。さっさと終わ



らせることによってもしかしたらどっちかの女の子と仲良くなるチャンスがやってくるかもしれない。声を賭ければいいって？そんな恥ずかしい事出来るなら今頃俺の彼女は二桁を超えている事だろう。「軽く読ませてもらいました」が具体的な説明をお願いできますか」「湯河原さん、説明お願いしますわ」

芝居がかったような指パッチンをやる。すると隣の少女がいつの間にか準備していた書類を読み上げ始めた。

「はい、えーっと、こっちの羽津女子学園高校……面倒なので女子高はそちらの高校と将来的に合同で文化祭を取り行いと思っているのです。ただ、今年からそういった行事をやるのも早すぎるので今回は裏方に回ると言う提案をさせていただきました」

「裏方？」

俺の疑問に生徒会長を名乗った大久保さんが口を開く。

「ええ、わたくしたちの文化祭は約二週間後、そちらの文化祭はさらにその後ですわ」

確かに、予定としてはまだ準備期間がある。しょぼいところはいよばいが、やるところは模擬店まで出すと言う頑張り具合……：というのも、運動会がいいか、文化祭がいいかでもめることもあり、決定権は生徒会長が握る事となる。

まあ、運動に向かないようなおデブさん達からのお願いによって文化祭にさせてもらった。

「はあ、なるほど」

「ですから、明日からこちらに生徒を派遣していただきたいのですわ」

「どういったことをする予定なのですか？」

初めて首を突っ込んだ千穂はしっかりと話をまとめてくれていた。偉い後輩だ。でも、ノートの端に『新戸先輩が女子生徒に目を奪われていた』とか余計なことだぞ。

「主に肉体労働ですわ」

「肉体労働？」

「はい、グラウンドに屋外ステージを作ってもらいたいのです。一週間程度でお願いします」

「……素人の私達にそういったものは出来ないと思いますが？」

「わたくしはあなたのようなオチビさんに頼んでいませんわ」

むっとした表情で俺の方を見る千穂。俺が言っただけじゃないだろ。

向こうの生徒会長さんはテーブルに肘を立てて指を組み、俺の方を見てくる。

「で、返事はどうしますの？」

「わかりました、やりましょう」

千穂が抗議の目で俺を見てくるが…後で説明する事しよう。

「そうですね、それは嬉しいですわ。そちらが文化祭になった時はこちらからも人数の足りないような場所に人を派遣でどうでしょう？」

「わかりました」

「交渉成立ですわね。湯河原、帰りますわよ」

「はい、失礼しますね」

二人はファミレスから帰って行く。執事さんが俺たちの飲み物代まで払ってくれたようである。

俺たち二人もファミレスを出て車に乗り込む二人を見送ることにした。

「新戸先輩、なんで出来もしないような事を承諾したのですか？」

「なーに、こつちにも考えがあるんだよ」

「考え？」

「そうだ」

詳しく説明しようとしたところで、湯河原と呼ばれた女子生徒が車から出てきて走ってきた。うん、いい揺れだ。

「すみませーん」

「何ですか？」

「あの、携帯の番号とアドレス交換してもらいたいんですけど」

「ええ、いいですよ」

「ありがとうございます」

生徒会長をしていて一番嬉しい時である。よかった、生徒会長になつて。

「ではまた、明日の放課後こっちの高校で会いましょう」

「はい」

俺は黒い車を見送りつつ、何とか頬の緩みを耐え抜いた。

「新戸先輩、明日から大変ですね」

「そうだな。とりあえず体躯のよろしい連中を何人が集めとくしよう……千穂はどうする？」

「もちろん一緒に行きます。新戸先輩のお目付け役として」

「……あいよ」

そういえば朝、黒髪縦ロールのお嬢様を見かけた気がするな。意外と家が近いのだろうか……とりあえず、明日から忙しそうである。

## 第七話：第一歩

### 第七話

向こうの要求に応えるため、俺は生徒会で比較的体躯のよろしい面子をそろえた。足りない分は暇そうにしていたラグビー部員で補っている。

「まさか女子高に堂々と入れるなんて夢のようっす」

「これも生徒会長様のおかげっす」

千穂はすでに外で待っている為、俺たちもそろそろ行かなくてはいけない。だが、その前にやる必要がある。

「いいか、何かしら指示があつたら絶対に従うように。たとえ自分の信念を曲げたとしてもだ。もし俺の言う事をちゃんと聞いたのなら俺からお前らに渡したいものがある」

「了解っす。期待しときますっす」

俺たちの心は一つにまとまった。そういうわけで出陣する事としよう。

現地解散になる為、鞆を持って二列横隊で廊下を歩く。すれ違う生徒たちからは特におかしい視線を受けることなく（ただ結構廊下を占有する為迷惑そうな顔はされた）、校舎の外に出ることができた。

「新戸先輩、そろそろ行かないと間に合いませんよ」

「わかつてる。こつちもようやく準備が終わったころだ」

俺の隣に千穂がやってきたので歩を進める。当然後ろの連中も俺に続く。

町に出てからの反応は様々で、車からわき見る者、足を止める者、曲がり角で俺たちを見かけて回れ右する者といった感じだった。十分程度で目的の場所へとたどり着く。千穂が連絡していたように校門前には向こうの生徒会長さんが腕を組んで仁王立ちしていた。「少し遅かったですね」

「すみません。これからすぐに作業の方へ移りますので案内してもらえますか」

「ええ、そうですね。湯河原っ案内しなさいっ」

「はいはい」

ひよっこりと向こうの生徒会長の影から現れて小さな旗を持っていた。旗には『可哀想な蟻ツアー』と書かれている。

「では出発します」

「じゃあ君たちは湯河原さんの指示に従って行動してほしい。ぼくはちよつとあちらの生徒会長に提案する事があるから」

「了解っす」

「期待してるっすよ、新戸生徒会長」

「千穂はあいつらの監督をしてやってくれ」

「わかりました」

二列横隊と千穂を見送ると俺は腕組みしている生徒会長さんに笑顔で話しかける。

「大久保生徒会長」

「何ですの？」

「こつちの先生方にこの学校の事を説明したいので校内の写真撮っでもいいですか？」

デジカメを取り出して務めて真面目な生徒会長になる。

「いいですわよ」

「じゃあ行ってきます」

くくく、これから俺の『ちよつとやらしくも楽しい女の子たちの園侵入作戦』が始まるのである。まず攻めるとしたらプール（室内プールらしい）、体育館、運動場…はいいか。

父親のデジカメを撫でてそれに捉える獲物を想像する。

「さあ、こちらですわ」

「？」

「初めて来た場所ですから案内するのは当然ですわ」

「あ、ああ…確かにそうですね」

まさかこの生徒会長が俺の事を案内してくれるなんてね。『ですわ』とか変な口調しているから常識外れの人かと思っただぜ。

大久保生徒会長の隣に肩を並べて歩くと視線を感じた。

「うわ…」

校舎の窓から沢山の女子生徒が俺に熱い視線を送ってくれていた。好きだから傷つけたい、思い切りぶん殴りたいそんな気迫がこもっているような視線だ。

あまり下手なことはしないほうがよさそうだ。

「大久保さんに校舎内の写真撮ってもらったほうがいい絵が撮れそうなのでお願いできますか？」

「…いいですわ」

デジカメを渡して運動場の隅をちらりと見やる。そこでは千穂がしっかりと男子生徒たちに命令を下しているようだ。あつちは千穂に任せておけばいいだろう。

「何をばーつとしてますの？」

「え？いや何でもないです」

今日は大人しくしておいた方がよさそうである。いや、隙をついて何か出来るかもしれない。

## 第八話：大久保生徒会長の旗立て

### 第八話

大久保生徒会長がまず俺を案内してくれ場所は室内プールだった。放課後と言う事もあって水泳部と思われる生徒たちが練習に励んでいる。

「ここが我が校自慢の一つである室内プールですわ」

「ほお」

一人がちょうど飛びこんであつという間に五十を泳ぎきる。

「速いですね」

「彼女は水泳部のエースですわ」

「あつちで膝を抱いて座っている生徒さんたちは？」

「あれはかなづちの方たちですの」

「泳げないのに水泳部ってことですか」

「いいえ、違いますわ。泳げない方たちを最低限泳げるよう指導するのも水泳部の活動ですの。溺れない様にする事で水の事故で危険を減らすようとしている我が校の方針ですわ」

それは凄いな。結構いい眺めだし此処を優先的に撮ってもらおうかな。枚数多めでお願ひしておこう。

「いち、に、さん、しっ」

おっほ…来てよかった。

「さ、次に行きますわよ」

「わかりました」

名残惜しかったが次に行くとのことで大久保生徒会長の後に続く。移動中は特に会話することもない為に俺は思う存分よそ見してかわいい女の子を心の中に残しておくことにした。

「我が校自慢の体育館ですわ」

広いのは当然ながら清潔である。そして女子生徒たちの熱い声が俺の耳朵を打つ。

「バスケ部とバレー部が使用しているんですね」

「ええ、どの方も優秀ですよ。何せ入部するにあたってテストを受ける決まりになっていますわ」

「テストですか？」

「テストに合格した場合は二軍から、出来なければ三軍から始まって一軍を目指す方式なのですの」

とても大変な道なんだろうな。こういったテストをするのか興味はあるが、それより女の子を眺めておくことを優先しておこう。

「あの隅っこで座り込んでいる生徒さんは何ですか？」

「あの方は一軍の秘密兵器ですの。現在のメンツでも十分やっていきますので未だ活躍した試合はありませんわ」

ベンチ要員…。

「あ、ここも写真お願いします」

「わかりましたわ」

記念として（可愛かったので）秘密兵器の方も写真に写ってもらって次の場所へ移動となった。

「この場所が最後ですの」

「え？もう最後なんですか？」

時間的にまだ余裕があると思う。三十分も経ってはいない。

「ええ、また明日も案内しますわ」

「そうですか。ではこの部屋は何の部活ですか？」

「生徒会室ですわ」

指を指される先にあるのは『生徒会室』と書かれた表札だったりする。気が付かなかったぜ。

「さ、どうぞ」

「失礼します」

案内された生徒会室は俺達の割り当てられた場所とは違って広くて清潔だった。まるで応接間のような場所とその奥には仕切りがあって机が並べられている。歴代の生徒会長の写真が飾られていたり、液晶テレビも置かれているようだ。



「今生徒会に所属している生徒は文化祭に向けての準備で席を外していますの」

「そうですか。集合写真も欲しかったですけどしょうがないですね」  
きつと美人揃いなのだろう。ちなみにこっちの生徒会はイケメン  
がかなり少なかったりする。

「面白い映像がありますの。見て行かれるといいですわ」  
「わかりました」

指定された席に座り、面白い映像とやらを見えることにする。一体  
どんな映像を流してくれるのだろうか。もしかしてこの学校のプロモ  
ーションビデオ的なものだろうか。俺らの高校もそうだったものが  
入学式のときに流されたりするもんだ。入学した時見せられて俺は  
寝ちまつたけどな。

「始まりますわよ」

「はい」

意識をテレビの方へと向ける。秘密と文字が出てきて一瞬だけ俺  
の期待を高まらせたが……意外なものが映し出された。

『ふああ……終わった終わった。中州、ノート貸してくれ』

『生徒会長ですから寝るのはまずいのではないですか？』

『ほら、あれだよ。俺は多忙だから寝ちやつたりするわけさ』

隣に座っている大久保生徒会長へと視線を向けた。

「あの、なんでこれが写っているんですか」

「提供してもらったのですわ。実に奔放な生徒会長ですね。授業  
中に居眠りするなんて信じられませんか」

「あ、あはは……」

普段は寝ていないんですよ。偶然、たまたま、ラッキーで寝ちや  
ったんですと言うのはさすがに憚られた。

「わたくしの周りにはいないタイプですわ」

「すみません」

未だテレビには俺の醜態がこれでもかと映し出されている。しか  
し、いつ撮られていたのだろう。

「謝る必要はありませんの。これを機に友達になっただけだと嬉しいですわ」

「ぼく……いや、俺が大久保生徒会長の友達ですか？」

てつきり逆に『こんな生徒会長とは手を組めませんの』って言われると思っただけだな。

「敬語も必要ありませんわ」

「でも三年生ですよね？」

「同じ生徒会長ですよ」

「はあ、わかりました。えーと、じゃあこれから敬語なしでしゃべります」

「お願いしますわ」

「なんで俺なんかを友達に？どう考えても似合わないと思うけど」「友達にそう言った『似合わない』とか壁は必要ないとわたくしは思いますわ」

うわ、正論言われた。

「わかった。詳しい事は聞かないようする」

「ええ、お願いしますわ。今後わたくしはあなたの事を呼び捨てにしますの。風太郎も紗枝とお呼びになると嬉しいですよ」

差し出された右手を後頭部搔きつつ握り返す。

「お世話になりますわ」

「はあ、こちらこそ……」

その後何故かツーショットを撮って（どこからか執事がやってきて撮ってくれた）カメラが返される。

「明日もお待ちしていますわ」

「あ、ああ」

運動場に続く下駄箱でさようならと手を振られて俺も手を振る。周りの女子生徒の視線が怖くて『何、なんで紗枝お姉さまとあんなに仲良くしている愚図がいるの？』とか『満月の夜に気を付けることね』なんて聞こえた気がした。気のせいであってほしい。

## 第九話：倉山千穂の旗立て

### 第九話

昼休みは飯食って昼寝したら無くなってしまう。今日も弁当食って寝ようとしたら中州が話しかけてきた。ああ、そういえば今日はジューディーがいないからか。いつもはいちゃいちゃしながら屋上へと行くんだけどな。

「新戸君」

「何だよ？今日はジューディーがいないから屋上でいちゃつけないから俺といちゃつこうってか？」

周りの空気はかなり白ける。一部女子が『やっぱり』とか何とか言っていた為に俺はため息をついた。

「で、用件は何だよ」

「倉山の事です」

「千穂の事でどうかしたのかよ。まさか…ジューディーから乗り換えようって言うのか？」

「いえ、そんな事はしませんよ。ジューディーがいいです」

「千穂が聞いたら怒るだろうな」

「僕はそう思いませんけど。話が進まないのので大人しく聞いていてください」

「はいよ」

中州は眼鏡を上げて人差し指を立てた。

「実は倉山がクラスで孤立しているそうです」

「そうか、だから何だよ。たとえ知り合いと言えど友達が出来て来ないとか関係ないだろ」

「新戸君は生徒会長ですから孤立している倉山をどうにかしてあげるのが筋と思います」

「はあ？なんだそりゃ？生徒会長って言うのは何でも屋さんじゃないぞ」

「でも公言していたではないですか。『友達が出来やすいような学校を目指します』と」

「どうだったかなあ」

「参考映像です」

携帯電話の画面を押しつけられる。確かにそこには俺が中州の言葉通り発言しているところだった。

「わかったよ」

「ではこれからこういった感じで孤立しているのか見に行きましょう」

「やれやれ、お節介め。」

一年達のクラスに上級生が行くのもちよつと変だろう。けどまあ、なじむって言うのかあまり関心を向けたりはしないもんだ。

ちよつと千穂のクラスから出てきた女子生徒を捕まえることにした。

「あの、ちよつといいかな？」

「はい？」

「生徒会の活動の一環として聞きたい事があるんだ。このクラスに転校してきた生徒がいるよね？」

「まっさらな手帳をめくりながら中州が援護してくれる。」

「名前は倉山千穂さんです」

「ああ、倉山さんですか」

「うん、そう、その倉山さんってクラスになじんでいるかな？」

「あまり馴染んでいない感じがします」

彼女のいい方からして『あまり』という言葉は正確じゃないだろうな。全然馴染んでいないに違いない。まあ、勝手に判断するのはまずいから慎重に調査しないとな。

「そうか、調査に協力してくれてありがとう」

「どういたしまして」

女子生徒がいなくなったところで俺はため息をつくしかなかった。「こりゃ本人呼んで話聞いたほうがよさそうだな」

「そうですね。これから僕が放送入れてきますので新戸君は生徒会室に行っていてください」

「あいよ」

千穂にどういった質問をすればいいのか適当に頭の中で整理してどういった反応が帰ってくるかもついでに想像しておいた。

「面倒です」

「友達なんて必要ないです」

「勉強に関しては先生に聞けば充分です」

もしもこんな回答だったなら冷めた高校生活を送っているんだろうな。

中州が放送を入れて一分もたたないうちに千穂が入ってきた。

「失礼します」

「早かったな」

「呼び出されましたから」

「そっか、じゃあ座ってくれ。用件を言うから」

中学の頃は体育会系の女子に引つ張られまくっていたからよかったんだけどきつとこの高校じゃあまり知り合いはいないのだろう。

「転校してきて学校に慣れたか？」

「多少は慣れました」

「クラスには？」

「……いまいち慣れていないと思います」

「友達は出来たか？」

「愛夏さんがいます」

「愛夏以外で」

「中州先輩やジュディー先輩がいます」

「そいつらも除外だ」

「生徒会の方とは友達になりました」

「同じクラスで頼むぜ」

俺の名前が出てこなかったのが地味に悲しい。

千穂はしばらくの間考えていたようだったが首を横に振った。

「いません」

「そうか」

「いまいち友達を作るのは苦手です」

「いたほうがいいよな？」

「それは当然です」

「そっか」

青春だねえ。転校してきて友達も出来づらいと言うのなら何とかしてあげたいもんだ。

「とりあえずもし話しかけられたらいつもより少しでもいいから話してみる。自己紹介とかもしただろうし前の場所での生活を話したっていい」

「わかりました」

一生懸命メモしているところなんて可愛い後輩の姿じゃあないか。ま、俺の場合は頭の中のメモ帳にしっかりと書きこむからメモ帳なんて不要だけどな。たまに誰かが消していつてしまうのが問題点だけど。

「じゃあこれから実践してくるといい。まだ昼休みはあるからな」

「頑張ります」

「いや、そんなに気張る必要もないけどな……」

両手を握りしめている千穂を見ると苦笑いしかできない。

「失礼しました」

「ああ、それなりに頑張れよ」

やれやれ、中州がこんなこと言って来なけりや今頃寝てただけどなあ……。放課後はあっちの高校に行かなくてはいけないし寝ておきたいんだよなあ。

「……新戸先輩」

「何か忘れ物か？」

いつの間にか出て行ったはずの千穂が戻ってきていた。

「いえ……いや、何でもありません」

そうつってまた出て行ってしまった。一体何だったんだろうか。

その日の放課後、千穂は俺に『友達に誘われたので今日は参加できません』と言ってきた。友達出来るのすごく早いのね……俺なんて誘ったその日は断られたりしてたんだぜ。

## 第十話：肩すかし

### 第十話

千穂がいないと言う事で俺が野郎共の指揮をとる二日目。

「ちゃんと足場がくつついているか危ないから確認してくれよ」

「ラジャーっす」

「千穂ちゃんは今日いないっすか？」

「千穂は新しく出来た友達に誘われて遊びに行ったそうだ」

「そうっすか」

二日目だと言うのにそれなりの足場が組めてきた気がする。これなら明後日ぐらいに野外ステージが出来そうだ。

「そっいえば会長」

「何だ？」

「昨日はこの生徒会長さんに案内されてどこに行っていたっすか？」

「校内を案内してもらっていたんだよ。カメラ持ってな」

昨日家に帰ってデジカメの中身確認したんだけど俺の期待するような下からの視線的なものは期待できなかった。まあ、健康的なスポーツ少女っぽいのは撮れていたけどな。

「さすが会長ですね。手が早いっす。見せてくださいっす」  
「ほれ」

他の作業中の生徒たちも手を休めてデジカメに群がる。俺が言うのもなんだけど、気持ち悪いな。

当然、連中の想像していたものと違うものが写っている為に反応はいまいちだ。

「なんだかがっかりっす」

「残念っす」

「作業に身が入らないっす」

「あのなあ、いきなり刺激的なものは身体に毒だろ？だから最初は



刺激の少ないものを選んだんだよ」

「なるほど」

「色々と考えているってことっすか」

「やたら感心しているがこんなところ大久保生徒会長……いや、紗枝に見られたら何と思われるのだろうか。せつかく出来た綺麗な女子の友人がいなくなるのも寂しいものである。」

「今日も校内を案内してくれるって言うていたけどお付きの者（たしか湯河原さんだったかな）がいうには今日は用事があると言う事で学校にいないらしい。」

「女子高にいると言うのに作業中一度も女子生徒に会うことがなかった。たとえば言うならホラー映画で最後までお化けの類が出ずに終わった感じだった。」

「あさって辺りに出来るだろうと思っていただけこの調子なら明日にはできるだろう。」

「会長、もうちょいで完成っすね」

「そうだな。あとはパネルみたいな奴をステージの上に敷いて完成だからなあ」

「まさかこんなに早く終わるとは思わなかったっす」

「だなあ。俺は湯河原さんに報告してくるから今日は解散だ」

「今日もいい汗かいたなーとかいいながら帰って行く生徒を見送る。」

「さて、生徒会長の押し事でもしてくるか」

「報告する為生徒会室へと足を向ける。うーむ、さっきは女生徒に会いたいと言っていたけど今度は会いたくないんだよなあ。なんで男子がいるの？って視線が痛いんだよ…下手したら通報される恐れがあるし。」

「女子高でそんなハプニング起こすのも楽しいかと思ったけど特に何もなく生徒会室にたどりついた。」

「すみませーん。湯河原さんいますか？」

「はい、どうぞ」

「失礼します」

生徒会室に入って今日の作業が完了した事を伝えた。

「明日ぐらいには終わりそうです」

「そうですか、それなら練習とかでも使用できますね。ありがとうございます。この事はちゃんと大久保生徒会長に伝えておきます」

「じゃあぼくはこれで失礼します」

一礼し、生徒会室を後にする。

校舎を出るまで結局女子生徒に会う事もなく（声は聞こえるが廊下では会えなかった）校門に出てからやっと女子生徒の後ろ姿が見えたぐらいだった。

「……帰るか」

どこか店にでもよってお菓子を買おうと思った矢先、見知った後ろ姿を見つける事が出来た。

「愛夏」

「あれ？兄貴？ああ、そういえば女子高でステージ作ってるんだっけ？」

「そうそう、ここから近い場所だな」

「ふーん、やっぱり女の子がいっぱいだよなぁ？」

「いや、放課後女子生徒見かけたのお前で三人目だ」

「……女子高だよなぁ？」

「会うとは限らん」

「運ないね」

「運があつたら今頃ドロドロの三角関係で苦しんでいる頃だろうよ」  
俺にそんな運があるとは思えないけどな。

「愛夏はちょうど帰りか？」

「うん、友達の家によって帰ったからちよつと遅くなったんだよ」  
普段も一緒に生活しているが朝はともかく帰りは一緒に帰る事が少ない。愛夏は一応部活に入っているんだが幽霊部員と言う奴でさぼってばかりだ。

「あ、そうだ兄貴」

「何だよ？」

「今日おばさん帰ってくるの遅いから何処かで食べて帰ろうよ」

「あのなあ、愛夏……お前もお小遣いをもらっているからわかるだろ？今月は厳しかったから大人しく家で俺の手料理だ」

「……あ、じゃあ愛夏が作ってあげようか？」

愛夏が料理を作ると後片付けが面倒である。まあ、たまにはいいか。

「よし、頼んだ」

「頼まれたよ、兄貴っ……それで何が食べたい？」

「……愛夏の得意料理って目玉焼きだったよな」

「うん」

黄身がつぶれる確率三割という意外と高確率な腕前である。

「卵のサラダも作ろうか？ゆで卵を入れてさ」

ゆで卵を作るとかいつてレンジの中にラップでまいた生卵を入れた時はマジでびっくりしたな。下手したらレンジが壊れていたかもしれない。

「まあ、愛夏も成長しただろうからな。お前に任せるよ」

「うん、頑張るよっ。お袋の味って言うのを見せてあげるよ」

その日の晩御飯、俺の前に出てきたのは黒ずんだ魚の焼き物と味噌を直接ぶち込んだ味噌汁だった。きつと、母さんがこれを食べたら愛夏に料理を教えることだろう。

## 第十一話：生徒会長、来たる

### 第十一話

上っ面の友達なんて腐るほどいる。普段はあまり話もしない仲、つまりは知り合い程度の関係なのに困った時になったら『友達だろう?』といってすり寄ってくる奴だ。そんな奴とは付き合わないほうがいい。

「風太郎、遊びに来ましたわ」

そして…その逆もいる。別にこっちはそこまで仲良くない関係だと思っただけなら向こうにとっては親友と思っただけのようなそんな人……俺の思いすぎじゃないけどな。

「あの、大久保生徒会長」

「もう…紗枝と呼んでいいと言いましたわ。お忘れになられてしまったの?」

「いやまあ、周りの生徒の目もありますから」

誰だ誰だとクラスメートたちが視線を向けてくるので対処に困る。こっちの醜態をさらすのは後の文化祭で十分だろう。

「ふうたるーの友達?」

「そうだ」

ジュディーがクラスの総意みたいな事を聞いてくる。中州がトイレに行っていたおかげでよかった。あいつは余計な事を言い出すからな。

「大久保紗枝。俺がいま放課後に行っている女子高の生徒会長さんだ」

「はじめまして皆様。大久保紗枝と言いますわ」

男子からは高嶺の花を見るような視線が、女子からは羨望と嫉妬の入り混じった視線が向けられる。

「それで今日はどうしたんですか?」

「ちやうど近くを通りかかったものでお邪魔しましたの」

「そうですか」

何だろう…背中に眼なんてないんだけどクラスのみんなに見られている気がする。

「此処じゃ何ですから生徒会室に行きませんか？」

「ええ、いいですよ」

彼女がにこつと微笑むだけで卒倒する男子生徒が数人。その中に彼氏がいたようでジェラシー全開の女子生徒が二名。これが大久保紗枝がクラスにもたらした被害である。

速やかに生徒会室まで案内してお茶を出す。

「粗茶です」

「敬語はやめてくださると助かりますわ」

これから何を話そうかと話題のタネを頭の中で拾う事にする。まあ、共通の話題は文化祭のことぐらいしかないかな。

「紗枝のところの文化祭はもうちよつとだな」

これに確実に乗ってくるだろう。いや、乗って来ないはずがないと思っていたが駄目だった。

「風太郎」

不満そうな顔をこちらに向けている。

「何？」

「今日は生徒会長としてこの学校に来たものではありませんわ。風太郎の友人としてこの学校に来たのです。話題を提供してくださるのなら風太郎関係にしてくれると嬉しいですよ」

「俺の事？」

「ええ、わたくしと風太郎は友達と言えどあまりお互いの事を知りませんもの」

知りませんとか言いつつ盗撮していたりするからな。俺の事は全部知っていてもおかしくないはずだが向こうが望んでいるのならそうすることにしよう。

「いまいちわからないんだけど」

「では普段放課後はどのような事をしていますの？」

「放課後？生徒会の活動以外で？」

「ええ、もちろんですわ」

「そうだなあ……」

普段何しているだろう。

「……買い物とかかな」

「買い物？」

「夕飯は俺の担当が多いからその材料を買いに行くんだよ」

愛夏は芸術を俺に食べさせようとするからな。あれは食べるものではなく現代アートに応募すべき作品である。

俺の通っている高校には一人暮らしをしている生徒も多いわけそんな連中（男女問わず）とはタイムセールで闘う事になる。中には人参の貸し借りや豚小間切れのやり取りが行われていたりするのだ。

「風太郎は料理が出来ますの？」

「少しはな。もちろん俺の母さんが作ったほうがうまいんだが……妹分が作るよりも俺のほうがうまいんだよ。紗枝の家はやっぱりあの執事さんみたいな人が作るんだろ？」

「違いますわ。カップ麺を食べていますの」

およそ想像できない言葉が返ってきた。

「え？」

「以前は確かにお付きの者が料理を作ってくれていましたわ。でもほんの少し前にお母様たちと喧嘩をしてわたくし一人暮らしを始めましたの」

「そう……なのか」

「カップ麺もおいしい物が多いので何も困ってはいませんわ」

「ずっと食べてると身体に悪いんだぜ？」

「それはわかっていますわ。わたくしとて女ですもの。社会は『男女平等』と唱えていますけどやはり料理は人として出来ないといけません。料理のお勉強もしているのですがこれがなかなかどうしてうまくいかないんですの」

困ったものだため息をつく紗枝に料理を教えてやりたいもんだ。残念ながら俺はそこまで料理がうまいと言っわけではない。

「じゃあ俺の家に晩御飯食べに来るか？」

「え？」

冗談で言っただけだった。

「いいんですの？」

「あ、ああ…冗談だったんだけどな。来たいんなら来ていいぜ」

「じゃあ今日から来ますわ」

「お嬢様、そろそろお時間です」

いつの間に現れたのか知らないが生徒会室の扉のところに執事っぽい人が立っていた。

「楽しい時間はすぐに過ぎてしまうのですわ。では今晚風太郎の家に行きますわ。場所は知っていますから安心なさって」

「そうなのか」

「ええ、相手の生徒会長の情報を湯河原に調べさせましたわ。もちろんプライベートについては一切調べていませんから安心していいですよ」

住居はプライベートに当たるのか、当たらないのか考えていると紗枝が生徒会室から出て行くこととしていた。

「じゃあ気を付けてな」

「はい、ではごきげんよう」

廊下を曲がって姿が見えなくなったようなので振っていた手を下す。紗枝の消えた曲がり角から千穂の姿が見えた。

「大久保生徒会長が来ていたようですがどうかしたのですか？」

「ああ、あんなお嬢様っぽい感じがするのに晩御飯は色々大変らしいぜ」

「？」

いまいち千穂はわかっていないようだ。多分、これだけでカップ麺に行きつける人はいないだろう。

## 第十二話：一步手前の招待

### 第十二話

気が付いてみれば明日は紗枝の学校の文化祭。月日が立つのは早いなえ、爺さんや…なんて言っている場合ではない。

「俺たちがやる事ってもう無いよな」

「そうっすね」

文化祭一日前は来なくていいと言われていた。しかし、いざ帰ろうとしたら紗枝から電話があって呼ばれたのだ。

校門辺りで待機するのも目立つので結局敷地内に入ってもはや定位置となっているステージ付近へと集まる。既にステージではリハ―サル等で使用されている為、この学校の生徒…すなわち女子生徒が結構いたりする。

「なんだか目立つっすね」

引き連れてきた男子生徒のうち一人がそういう。他の生徒も頷いている。

「そりゃそうだろ。ここは女子高だし、俺たちを呼んだ人物がいない…拳句の果てに理由もわからずじまいだ」

千穂は友達と一緒に遊びに行ってしまったている為いけない。友達が出来た事はいいことだ、連日申し訳なさそうに参加できないと言ってくる事も良ししよう。

しかし、男子生徒どもが此処について千穂がいないことに気づくと『会長ドンマイです』と嬉しそうに言うてくることは絶対に許せない。

「あの一」

「はい？」

男どもを睨みつける視線をすぐさま取り消して生徒会長フェイスで微笑みかける。視線の先にはショートカットの可愛い女子生徒が頬をピンクに染めて立っていた。



「あ、あのつ、えーっと……大久保生徒会長が新戸生徒会長さんに生徒会室に来てほしいって言っていました」

「そうなんだ。わざわざ伝えてくれてありがとう」

「そ、そんな……と、とんでもないですっ。新戸生徒会長と話せて、私……嬉しかったですっ」

そういつて女子生徒は走り去ってしまった。

「こほん、みんな……どうやら俺達のご奉仕は彼女たちの中で評判になっているようだな」

野郎共は首を何度も頷かせている。会長に続けと鼓舞している者までいる。

「何か手伝ってほしい事はないか、困っている人はいないかどうか探すように。俺はこれから生徒会室に行つて来るからな」

「合点つす。ご武運を」

「お前らもな」

皆が敬礼をして俺を送り出す。俺も一度敬礼し、生徒会室へと向かうのだった。

既に俺の顔が売れているのか、それとも元から人気があったのか定かではないが女子生徒たちが挨拶をしてくれるようになった。

「失礼します」

「風太郎、いらっしやい。本当は直接わたくしが案内しようと思つていたので見ての通り忙しいのですわ」

縦ロールはそのままに髪の毛を後ろに縛っている。紗枝が持っているものは比較的大きめの段ボールだった。

「これが片付きましたら説明いたしますわ」

「じゃあ手伝うよ」

「そうですね。お願いしますわ」

持ち上げるとそれなりの重量。きつと紗枝だったら重たいだろうな。

「これさ、何が入ってるの？」

「パンフレットとか学校紹介の書類ですわ。文化祭に配るんですの」

「ふーん」

「湯河原さんは？」

「湯河原は別の場所で動いてもらっていますわ」

そんな作業を続けて十分程度。ようやく箱も残り少なくなってきた。

「もう少しですわね」

「そうだな」

結構いい運動をしたもんだ。暑くなってきたんだけど紗枝はそんな素振りも見せていない。羨ましいものだな―と思っていたら実は疲れていたようだ。

落ちていた一枚の紙切れ（文化祭のお知らせ）を踏ん付けて派手に転んだ。

「……大丈夫か？」

「え、ええ……」

右足があらぬ方向に一瞬だったけど曲がっていた。立ち上がろうとする紗枝の肩を押して座らせる。

「な、何ですの？」

「間違いなく足を捻ってる。立たないほうがいい」

履いていた物を脱がせて靴下も取り去る。足首に少しふれただけで紗枝の顔がしかめっ面になったのでほらなと呟く。徐々に腫れてきているようだ。

「こりや保健室行きだな。保健室ってここから近いのか？」

「別にわたくしは大丈夫ですわ」

再び立ち上がろうとする紗枝を再び座らせる。

「安心しろよ。残りは俺がやっておくからさ」

「でも……」

「さ、じゃあ運んでいつてやるから動くなよ」

おんぶは駄目だ。紗枝のスタイルは平均的高校生より数段上でけが人相手によからぬ事を考えると言う駄目人間になりかねない……  
…となると、一度でいいからやってみたかったあれで行ってみようと思う。

「よつと」

「あ、あの……」

いわゆるお姫様だっこ。小さい頃は近所のおっちゃんたちによくされていたもんだ。まあ、肩を貸せばいいとかそういう野暮なことはなしだ。

「恥ずかしいですわ」

「大丈夫、俺も恥ずかしいから」

保健室に到着するまで誰にも会いたくないもんだと廊下続く扉を開ける。

「……皆様どうしたんでしょうか？」

「え、えーと……」

紙コップを肩耳にあてたこの学校の生徒さん達がかなりの数いた。  
「大久保生徒会長が殿方と一緒にになって襲われないかと……皆で警戒していたのです」

集まっていた面子の中でも比較的真面目そうな女子生徒が真面目ぶった表情で……その割には顔を真っ赤にしている……答えてくれた。

「あ、あなた達……早くお散りなさいっ」

羨ましそうな視線を投げかけていた生徒たちはその言葉に従って何処かに行ってしまった。でもまあ、逃げ込んだ教室の中からこちらを見ているからあまり意味がないと思う。

「最悪ですわ」

「悪いな……出来るだけ人に見つからないよう保健室に行ってみる」

「……お願いしますわ」

こういう時に限って運は俺に味方してくれない。女子生徒たちが

一列きれいに並んだ廊下の真ん中を（保健室はこちらと言う板を持った生徒もいた）通る羽目になった。

「……」

「……」

もちろん、紗枝はおるか俺も顔が真っ赤である。中には写真を撮る者もあらわれていた。多分、この学校の新聞部とかそこら辺だろう……うちの学校と同じような顔をしているから間違いない。

「お疲れさまでした」、はい、みんなかいさーん」

俺が保健室にたどりつくと同時に生徒たちは文化祭に向けての作業に再び取り掛かり始めたようだった。

「……すごいな、ここの生徒たちは」

「恥ずかしい真似をさせて申し訳ありませんわ」

「気にするなよ」

保健室に入り、近くの椅子に座らせようとすると紗枝の手が俺のシャツを掴んでいた為に離れなかった。

「紗枝、手を放してくれ」

「あ……はい」

「あら生徒会長さんじゃないの。男を連れてどうしたの？」

人のよさそうなおばさんだ。恰幅が良く、理想の保健室の先生だったりする。

「あの、足を捻ってしまったようなんです」

「あらあらそうなの？じゃあこっちで面倒見るわ」

「お願いします。僕はまだ用事があるんで失礼します」

「風太郎っ」

「何？」

もしかして支えていた手が胸を触っていたとかそんな事を言うのだろうか……。

「な、なかなかいい乗り心地でしたわ」

珍しくぷいとそっぽを向いた讃辞である。いつもならズバツと言ってくれるのにな。

「乗りたいときはいつでもどうぞ、生徒会長さん」

冗談言ってみたつもりだったんだが紗枝は顔を真っ赤にして俯いてしまった。うーむ、反応ないと恥ずかしいんだけだな。

結局、俺たちがなぜ呼ばれたのか聞きそびれてしまった。紗枝は夕方俺の家にやってきて病院にまで行ったと説明してくれた。すっかり夕飯を食べて帰ったところを見るとよほど気に入ってくれたようだ。家にまでわざわざ来ていたというのに聞き忘れていた俺も馬鹿だけだな。

## 第十三話：文化祭

### 第十三話

紗枝の学校の文化祭当日は土曜日（俺たちの学校は何故か金曜）だった。以前は二日間にわたってやっていたそうだが、今では一日限りと言う事で一般のお客さん（特に男性客）も多いらしい。補足としてだが、数年前にナンパが原因で一年生の子と客の間で色々問題が起きた為に声かけ等は学校側から禁止されている。そう言った行為に及んだ者は問答無用で警備員から締め出されるのである。

「会長つ、生徒に手を出す輩を閉めだしてきてやったつす」

「会長、こつちにもいましたから同じく締め出してやりましたつす」

「まさか本番当日に警備の仕事を担当させられるとは思わなかったな」

開始二時間前に俺たちは呼び出されて警備の仕事を担当させられたのである。制服支給とか（恐ろしい事に個々に手渡された制服はピッタリのサイズだった）最初から言ってくればよかったのに……多分、昨日言おうとしていた事は警備の事だったに違いない。

一応警備員の人たちも別にいるにはいるが、やはり人は多いほうがいいだろう。俺の仕事は作戦本部、この学校の生徒会室にて今回の手伝いについての意見感想をまとめ上げることだったりする。千穂がいたら代わりに書いてくれたかもしれないけど生憎彼女は愛夏や友人と一緒に文化祭を楽しんでいる事だろう。

入れ替わり立ち替わり入ってくる生徒（警備員）の報告を受けたり、紗枝を求めてやってくる女子生徒達の相手をしなくてはいけない。どうやら紗枝はこの学校のアイドルのようなものでもあるそうだが、やってきた一人の少女の話によると一緒に思い出の写真を撮るとか何とか……俺も複数の女子生徒のカメラに収められたりする。「だるいなー」

時計を見ると既にお昼時。なるほど、だから校内が静かになっていたのか……みんな腹ごしらえに向かったと言う事だろう。

この生徒会室は作戦本部と言いながら警備員の生徒たちが向かう場所は可愛い生徒たちがいる模擬店だ。誰も人がいないこの場所に来る人等稀だ。あちらの生徒会の人が来ても俺の顔を見て『失礼しましたっ』といって出て行ってしまう。

どこで食べようかともらったパンフレットを確認していると紗枝が生徒会室に入ってきた。

「風太郎、書き終わりましたの?」

「んゝまあ、それなりに」

「歯切れが悪いですわね」

「もうちよつとで終わる。これは間違いない」

俺が妥協したら終着駅である。清書は家でやればいいし、とりあえず昼飯を食べることにしよう。

「紗枝はもうお昼済ませてきたのか?」

俺の問いかけに対して答えとばかりに二つのコンビニ袋のようなものを見せてくる。いい匂いがしてくるところを見ると出来たてのようだ。

「それがお昼か?」

「ええ、風太郎と一緒に食べようと思いましたの」

「そっか、じゃあ片方もらっていいんだよね?」

「構いませんわ。さ、どうぞ」

「ありがてえ、金は?」

「結構ですわ」

「そっか、じゃあありがたく頂戴するぜ」

差し出されたほうの袋を覗く。たこ焼きとたい焼き、ホットドックが入っていた……たい焼きはお昼としてどうだろうか。

とりあえず紗枝の隣に腰掛けてホットドックに食らいつく。

「久しぶりですわ」

「何が?」

「こうやって誰かと一緒にお昼を食べること……ですわ」

紗枝の方は幕の内弁当だった。そっちの方が良かった……

「一緒にお昼食べる事って……普段一人で食べてるのかよ？」

「ええ、特別授業で少し遅れてしまいますの。教室に戻った時は皆さん既に食べ終わっていますわ……必然的にわたくしは一人、ですから生徒会室で一人で食べていますの」

「そこはやっぱり『一人で食べて大変なんだな』って言ったほうがいいのか？」

「そうですね……いっその事風太郎がこちらに来てくれればこうやって毎日一緒に食べてくれるんでしょうけど……残念ですわ」

冗談で言っただけ……だよなあ。だってこの学校女子高だし、俺が転校しなくてはいけない時あれを切断しないといけなくなるんだろ？

「しかし風太郎も残念ですわね」

「何が？」

「こうやって部屋にこもっていても文化祭を楽しめませんわ……生徒会長だった事を後悔してはいませんか？」

そういう質問をするという事は生徒会長だと言っ事が嫌なのだろうか……

「紗枝は生徒会長嫌だったのか？」

「少しだけ嫌ですわ」

「そっかそっか」

きつと俺の顔は今頃にはやけていることだろう。一つ、意地悪な質問を思いついたのだ。

「紗枝は俺と知り合いになったことも嫌だったのか」

「そうですね」

思いつきりパンツで……いや、パンチで殴られた気分だぜ。

「え、ま、マジで？」

「冗談ですわ」

「冗談かよ……」



「ええ、風太郎が意地悪な事しようとしたお返しですわ…… お見通しですの」

「やれやれ」

たい焼きもさつさと口にする。残りのはたこ焼きだけになった。

「あんまり知り合って長いつてわけじゃないけどまさかここまで話せるようになるとは思えなかったぜ」

「わたくしもですわ」

夕飯一緒に食べたりのたのも大きいかもしれないな。結構付き合いやすい性格してるし、おかしいのは口調だけっていうのも大きい。しかし、持ってきてくれたたい焼きかなりおいしかったな。

「一つ、風太郎に申し上げなくてはいけない事がありますわ」

「ん？」

たこ焼きをさつさと口に放り込む。八つ入っていて残りは五個といったところか……残り少なくなってくると慎重に食べ始めちゃうからな。

「わたくし、あさつてには転校しますの」

「悪い、聞いてなかった何だつて？」

「……今度、転校しますの」

持っていたたこ焼きを落としそうになった。だが安心して欲しい、寸でのところでしたっかりと守って見せたから。

「じゃ、じゃあこっちの文化祭協力はないって事になるのか？」

「わたくしのポストには湯河原が付きますから安心して欲しいですわ」

顔は伏せたまま、決して俺の事を見ようとはしていなかったりする。

「こっちの文化祭には来てくれないってことかよ……というか、いつから転校するってわかっていたんだよっ」

肩を掴んで揺さぶった俺は紗枝の表情を見る事が出来た。

「ぶっ……あはははっ、冗談ですわ」

「はあ？」

何と言われたのかいまいちわからなかった。

「冗談かよ」

「どのような反応をしていただけなのか気になりましたの……嬉しいですわ、そこまで入れ込んでいただけているとは思いませんでしたわ」

そのまま認めるのも何だか嫌なので一応言い返そうとしたが残念ながら放送が流れ始めた。

『大久保紗枝生徒会長、至急生徒会室まで来てください……繰り返します……』

「呼び出しですのでこれで失礼しますわ」

「ああ、行つてらっしゃい」

「風太郎、戻ってきたら一緒に文化祭周りますわよ」  
「わかった」

それまでには多分俺の仕事も終わっているはずだ。ま、すぐに帰ってくるかもしれないから準備だけしておくとしてしよう。

## 第十四話：後の祭り

### 第十四話

ソファーに背中を預けていたつもりだったんだ。気が付いたら寝ていた。現在時刻四時四十九分……。夕焼けが普段より早く俺に顔を見せてくれている。

「起きましたの？」

俺の顔を覗き込んでいるのは紗枝である。

「ここにいたなら起こしてくればよかったのに」

「気持ちよく寝ていたようでしたのでそっとしておきましたわ。でも、少しだけいたずらしましたの」

「悪戯……ねえ」

顔に何か書かれたのかと（頭に肉か、愛のどっちかだろうか米かもしれん）鏡に写して見たけれど特に何もなかった。

何だ、冗談かよ……。

「文化祭終了って何時だっけ」

「五時半ですけど五時が一般の方の終了時刻ですわ。例年通りなら片づけは五時からですよ」

時計を確認しながらそう言う。俺もついでに時計を見るけど変わりはしなかった。タイムマシンが欲しい。

「……終わった……俺、なんで寝てたんだよ……」

中州は俺の家にやってくるのとたまに眠る。人の家でぐっすり眠れるなんて信じられないんだが……。まさか、家でも何でもない学校で、しかも女子高で眠ってしまうなんて俺は何を考えているのだろう。

「そんなに落胆しなくても大丈夫ですわ」

「だってもう終了だろ。片づけ、始まるって言ったじゃないか」

「片づけと一緒に回りますわよ。サボっている生徒にはお仕置きしないといけませんの。それに少しなら雰囲気味わえますわ」

「そっか、わかった」

生徒会室を二人で出るとそこには紙コップをもったこの学校の生徒たちが立っていた。各自、文化祭の格好（侍、ウェイトレス、お化け、ナースetc…）で一生懸命聞こうとしている姿だった。

「……………」

「オー、これは失礼しました」

「ジューディーまで……………」

その中には中州とジューディーが混じっていたりする。俺と目が合うと中州は手を挙げた。

「お邪魔虫は移動します」

中州のこの言葉で蜘蛛の子を散らすかのように生徒たちはいなくなってしまった。おいしい、二分後だったら全員お仕置き対象だったのに……

「片づけをきちんとしてくれるのか心配ですわ」

「………… 真面目だなあ」

ま、こんな美人と噂されるんならいい事だろうけど紗枝にとっては迷惑になるんだろうな。

「風太郎」

「何だ？」

「今日はしっかりあなたの小さな相棒さんに許可をもらってきていますわ」

「許可？」

「って、小さな相棒って誰だろうか？一昔前にあっていたミクロマ？」

俺の疑問に胸を張って紗枝は笑っていた。

「ええ。今日一日風太郎はわたくしの相棒ですの。残念ながら殆ど一緒にいる事は叶いませんでしたわ。これも生徒会長の宿命ですわね」

「すまん、俺が昼から寝ていたのも原因だ」

「いいんですの。風太郎にはちゃんと復讐してあげましたわ」

悪戯っぽく笑っている紗枝に俺はどうする事も出来ない。何せ顔

に何かされたわけじゃないし、身体の方も大丈夫だ。

「さ、時間は有限ですから行きますわよ」

「お、おう」

紗枝に腕を掴まれて残り時間少ない片づけを周る。さぼっている生徒は特に見当たらず、各自一生懸命片づけをしている為に特に指導する必要なんてなかったが、中には売れ残った物を俺達に渡してくれる優しい生徒さん達もいた。

後はステージの片づけを見てくるだけだろうか。組立ての方は結構時間がかかった気がしたけど、俺たちが行くころには殆ど片づけられていた。

「片づけ、早いな」

「ええ、暇な生徒さんも手伝ってくれているっす」

指さす方には和気藹々と片づけをこなす我が校の生徒とこっちの生徒さん。

「そっか」

「もう終わるんで会長も帰って構わないっすよ」

さあ、手伝わない人たちはどいたと言わんばかりの態度である。実際、手で追い払われていたりする。

「これで終わりかな」

「風太郎、最後に屋上に行きますわよ」

「屋上……？ああ、わかった」

屋上まで何か設置していたのか。うーん、冷静に考えて放送機具とかだろうけどそうだったのはすでに片づけているんじゃないだろうか。

二人して階段を黙って昇る。おかしい、どう考えてもこの階段は人が通ったような跡がないし、見えてきた屋上へと続く扉は厳重に鎖で幾重にも巻かれているじゃないか。

「なあ、紗枝：扉、閉まってるぜ？」

「大丈夫ですわ」

鍵を出して当然ながらあっさりと解錠。鎖が重たい音をたてて踊

り場に落ちた。

「さ、どうぞ」

「ああ……」

扉の奥は日の沈みそうな開け放たれた屋上だ。俺の予想通りそこに文化祭関係の物が置かれているわけもなく、人が来たような形跡も一切ないような場所だった。かすかに生徒たちの声がグラウンドの方から聞こえてくる。

「この場所に来たのはわたくしが入学して以来ですわ」

紗枝は転落防止用のフェンスを掴んでそういった。

「そうか」

「以前の生徒会長から鍵をくすねたんですの」

「なんで鍵なんて盗んだんだ？」

他の話を振ったところで『空気読めよ』といった視線が帰ってくる。こと間違いなしだろう。

「一人になりたかったんですの」

楽しそうなグラウンドを眺めながら、実に寂しそうに紗枝はため息をついた。

「詳しい事情は教えてくれるのか？」

「……そうですわね、口づけを交わしてくれたら考えますわ」

そうか、じゃあ口づけさっさとするから教えてくれ。

「おい、本当にいいのかよ？口づけってキスだろ」

既に準備は整っている。というか、それとなく肩に手を回してしつかりと紗枝の両目を見て話していたりする。あれか、これはこのままあーなっってこうなっって穏やかな家庭を築いてあの頃はとかソファアで仲睦まじく語る誰もが望む一歩ではないだろうか。

「お、俺でいいのかよ？」

「ええ……」

じゃあ遠慮なくいきまーすと言わんばかりに顔を近づけようとしたんだが、済んでのところで紗枝の手に阻まれた。

「残念……時間が来てしまいましたの」

「時間？」

それがもし、擬音を立てていたのなら『ひゆるるるー』ではなく『ズキューン』だっただろう。俺の後頭部に勢いよくぶつかったのは缶コーヒーだった。

「いてえな」

「……」

緑茶の缶を持った千穂が面白くなさそうに立っていた。俺を一瞥すると緑茶の缶をこっちに投げてきて何処かに行ってしまう。

「いつかまた、こうして二人で空を眺めたいものですわ」

「あ？ああ……そうだな」

千穂もいなくなったしさっきの続きを……と言っわけにもいかないうつだ。紗枝の見ているのはどの部分かと一生懸命視線を追っていると話しかけられる。

「風太郎」

「何だ？」

「風太郎は最高の友達じゃありませんけど」

「悪かったな」

「特別な友達ですわ……さ、そろそろおりますわよ。教師に見つかったら説教されますの」

「ああ」

一人になりたかった理由は後日聞くことにしよう……その日は普通に紗枝といつものように別れた。

数日後、こっちの文化祭の件について相談しようと紗枝の学校に行くとき生徒会長の名前が湯河原さんに変わっていた。湯河原さんの話によると紗枝は転校したとのことだった。

## 第十五話：相談

### 第十五話

俺らの文化祭が始まるまで約一週間。湯河原さんとの話し合いも終えて、帰宅ついでに生徒会室のゴミ箱の中身を捨てに校舎裏へとやってきた。生徒会室のゴミ捨て当番は気付いた人が捨ててくると言う暗黙の了解で成り立っている為、必然的に他の生徒より生徒会室で長い時間を過ごす生徒会長が捨てに行く義務を負っているようなものである。

「お」

さっさとゴミを捨ててそのまま帰ろうと思ったわけだが、気弱そうな男子生徒が顔を真つ赤にしている姿がそこにはあった。多分、告白だろう……何せこんな時間帯に校舎裏なんて告白以外思いつかない。まあ、いまだき校舎裏に呼び出して告白なんて時代遅れだと思うけど（実際は校舎裏に呼び出して脅して金をとるほうが多いかな）昔懐かしい光景ではないだろうか。

「嗚呼、青春かな」

そして性春に変わるんですね、先生……じゃなくて、だ。とりあえず相手はこの誰だか確認するのも俺の仕事……いや、生徒会長の仕事のはずである。振られれば仲間、オーケーもらったその日にはひっぱたいてやりたい。

相手を確認しようとする肩を軽く叩かれた。

「兄貴、職員室で大神先生が呼んでるよ」

「え、マジでか」

大神先生とは音楽を担当している実に小うるさい先生である。軽口叩いたものは七代先まで祟りますとか言っていた事があったらしい。面倒な先生として生徒の中では有名なのでどんな生徒も先生の前で非常に大人しくなる。

「悪いけどよ、あそこで俺のようなシャイボーイが人生の分岐点に



立ってるんだ。だから俺の代わりに成否を見届けてやってくれ……  
あと、相手が誰なのかも一応見ておいてくれ」

「全く兄貴もデバガメだねえ……ま、あとは愛夏がしっかり確認しておいてあげるから早く行ってきなよ」

「おうおう、言ってくるよマイシスター……あと、そこに置いてあるゴミも捨てておいてくれ」

愛しい妹に別れを告げて俺は職員室へと向かったのだった。ちなみに大神先生に呼び出された用事は単なる説教で『最近たるんでい  
るのではないか?』といった事だった。三十分ほど言われ続け、よ  
うやく帰路に就く事が出来た。

「ふー、やれやれ」

当然、その時間帯には誰もおらず愛夏もいなかったのだから家に帰る  
事となった。帰り道に面白い事も起きず、家に帰りついて早速愛夏  
に先ほどの事を聞いてみることにしたのだ。

「え? あ、うーん……えっとね、そのね、何って言うか……愛夏ちょ  
っとわからなかった」

「わからなかったってどういう意味だよ」

「えっと、だからわからなかったんだよ」

そういつて部屋に入ってしまった。

「何だあれ……」

わからなかったのなら仕方がない。あまり他人の恋路を邪魔して  
いると缶コーヒーを投げつけたくなるかもしれないからこれ以上の  
詮索は止しておこう。

こんな感じでその日は平和に終わったわけだ。

次の日、中州と共に生徒会室で弁当を食べていると千穂が入って  
きた。いつものように無表情……と言うわけでもなく、どこか落ち着  
きのない表情をしている。

「新戸先輩、相談があります」

「おう、何だ?」

友達が出来ないのか? いや、それならこの前解決したじゃないか。

うんうん、友達なんて多く作るもんじゃないぞ。金を借りるときだけへこしやがって期限当日待ち合わせ場所で待っても来ないし、電話すれば留守電にしやがって…観念したかと思えば払えないから期限を伸ばしてちよとか…いや、別に何でもないですけどね。

「実は男子生徒から告白されたんです」

「ははっ、そうか。そりゃよかったな………？」

今何と言っただろうか…なんてべたな事は言わない。そう言うのは要らない。目の前に座っている中州はいつもの表情で多分、俺の顔も一応いつもと変わらない表情をしているだろう。

「中州、席空けてくれ」

「わかりました」

「さ、詳しく話を聞かせてくれよ」

弁当をさっさとかきこんで千穂に座るよう促す。昨日の光景がふと頭に浮かんだ。いや、まさかね。

## 第十六話：アドバイスの結果

### 第十六話

千穂が生徒会室に相談しにやってきて数時間後、俺はぼーっとしている事を教師に咎められて生徒会室で微妙にへこんでいた。前髪を自分でちょっと切っていたら切りすぎちゃった時ぐらいにへこんでいた。

「はあ……」

「新戸君元気がないですねえ。もしかして千穂さんが告白されて動揺されているんですか？」

ぐるぐる眼鏡を人差し指で軽く押し上げる中州に首をすくめる。

「いや、別にそんなわけではないぞ」

「じゃあふうたるーはなんで元気ないの？」

中州の後ろからジューディーが出てくる。隠れていたつもりのようにだが中州より身長が高いし、髪の毛も見え見えだ。忍者のようなコスプレをしているが、忍者はちょんまげのかつらをかぶって行動しないと思うぞ。

「千穂にアドバイスしただろ？」

「してましたね」

「あれでよかったのだろうかと思ってたんだよ」

「へえ、告白された事のないふうたるーがねえ」

ちらつと頭の中に黒髪のお嬢様が右から左へと移動していった。

今頃何しているだろうか。

「ジューディー、言いすぎです。新戸君は大久保生徒会長に逃げられたんですから傷心中なのですよ」

「ああ、そういえばふうたるーの事を好きになった奇特新生徒会長もいたねえ」

言いたい事をズバツと言えるこの二人ならきつとこれから先もいいコンビのままなんだろうな。

「失礼しまーす。兄貴ー、一緒に帰ろうよー」

生徒会室に愛夏が入ってきた。

「あれ？中州先輩にジューディー先輩まで残ってるの？」

「これから世紀のふうたろー残念顔を見る事が出来るの」

目を輝かせているジューディー：友達として酷くないだろうか。いや、別に俺は残念顔なんてしないけどな。

「今日のお昼、千穂さんが告白されたことに対してどうすればいいのか新戸君に相談しに来たんですよ」

いまいち理解していないような愛夏に中州が説明している。

「ふーんなるほどお」

「ま、俺としてはあのアドバイスが役に立ったかどうか知りたいだけだ。そういう理由でこうやって生徒会室から校舎裏を監視している」

校舎裏には千穂が一人たたずんでいる。

「アドバイスってどういう事したの？」

「新戸君は『嫌なら断れ、嫌じゃないなら受け入れろ。はつきりしないのが一番駄目だ』って偉そうに言っていました」

「それアドバイスかなあ」

「ふうたろーそれ違うと思うけど」

「新戸君なりのアドバイスだと思います。千穂さんはやたら納得していたようでしたから」

ここで俺の堪忍袋の緒が切れた。

「さつきからうるさいなあ……もうとっくに帰っていい時間だろ？」

さつさと帰っていちやいちゃでもしてるよ」

「えー兄貴がいないと出来ないよ」

「いやーん、秀作く助けてー」

「いつもだったら寛大な心の新戸君が怒っていますからね。きつと千穂さんが告白されたのがよほど腹に据え兼ねたのでしょうか」

「よかった、すぐに運命の人に出会えて……ああはなりたくないわ」  
「新戸君には悪いけど僕もです」

「秀作っ」

「ジュディーっ」

二人で抱きしめ会っている光景なんざ見たくないので校舎裏へと視線を戻す。愛夏も両手を広げて寄ってきたので威嚇しておいた。

「お」

ちょうど男子生徒が現れてスタンバイしていた千穂が相手の方へと移動し、頭を下げた。どんな表情をしているのかここからは見えな  
いが、相手の顔を見ることはできる。

「……おや、千穂さんは頭を下げましたね」

「相手の子は四つん這いになってるよ」

「土下座までしちゃったよ……」

千穂は一礼して去って行った。相手の男子生徒はどうやら泣いているようである。

「振っちゃったようですね」

「惜しい、ここで千穂ちゃんが頷いたらふうたろーがどんな表情したのか興味あったのにつ」

「……さーて、見るもんみたし、帰るか。今日は機嫌いいから帰りにたこ焼きでもどうだ？」

「おーいいねえ」

「愛夏も食べる」

見ていて実に静かな戦いだった。でもなあ、まさか見ていたなんて千穂は知らないだろうしアドバイスの結果をわざわざ聞くのも考えものである。

## 第十七話：生徒会長通常業務

### 第十七話

紗枝の学校に比べてこちらの文化祭は規模も小さく、午前中で一応終了予定である。あとは講堂、体育館のステージで自己満足ライブが行われたり、地域のご老人の方々と心温まる触れ合いが（将棋、囲碁などの静かな戦いが行われる）ある程度だろうか。

やること自体が少ない為に湯河原さんとの打ち合わせも特にないように思えた文化祭三日前、その日は珍しい事に千穂がいる日のことだった。

「新戸生徒会長っ。あたし達、模擬店がやりたいんですっ」

そういつて生徒会室に入ってきたのはソフト部の皆様。どうするんですか生徒会長という視線が俺に向けられている為、咳払いをしてとりあえず入ってきた部員（数十名ほど）のリーダー格を座らせることにした。

「僕としては模擬店を文化祭でやると色々勉強になることもあるから賛成だよ。けどね、学校側に許可をもらったりしないといけない。そして準備も今からやって間に合うのかな……」

最初に言うておく……別に面倒と言うわけではない。女の子から頼まれて（しかも数十人が一人の男子生徒にお願いするなんて俺の知る限り無いことだ）嫌な男もいないだろう？あくまで生徒会長としての意見である。

「この前女子高の文化祭に行って感動したんです。ああ、あたしたちもこんなことをやってみたいなって……これ、見てください」

手渡された紙は何度か目を通した事のある紗枝の居た学校で使われていたいわば模擬店の企画書のようなものだった。向こうで使用されていたこれまでのノウハウがびっちりかきこまれている物で紗枝からも『貴方が生徒会長ですからお見せするのですの』といわれたぐらいだ。

「今年はこれを真似するぐらいしか出来なんですけど……やりたいんですっ」

部員一同が頭を下げてくださいと叫んだ。廊下で待機している一年生も頭を下けている。さらに今は部活をしていない三年生までいたりする。まあ、三年生には主に写真のモデル等でお世話になったからな。

「わかりました。僕が今から職員室に行って模擬店の許可をもらってきます。でもあまり期待はしないで下さいね」

さすが生徒会長だーという声も聞こえてくる。マネージャーの女の子は今度中州先輩×新戸生徒会長で一冊本を書いてくれるとまで言っている……丁重に断ったけどな。

「今日の放課後にはちゃんと結果を報告しにいきます」

「お願いしますっ」

ソフト部の人たちを見送ると今度は生徒会メンバーが詰め寄ってくる。

「あんな簡単に安請け合いしちゃって大丈夫なんですか」

「楽しそうですけどもう文化祭まで時間ないですよね」

「パンフレット、出来ちゃってますけど」

「あー、はいはい。全部大丈夫だ。俺がなんとかする」

あーあ、あの子たち可哀想だあとか早速言っているメンバーまでいるから信頼なんて最低値なんだろうな。野郎の信頼なんざいらんが、女子の信頼は高くしておきたい。

「千穂、職員室までついてきてくれ」

「わかりました」

「じゃ、行って来る」

「どうせ駄目でしょうけど新戸君、頑張ってきてください。僕も模擬店楽しみですから」

「おう、任せとけ」

中州の言葉に背中を押され、俺は職員室を後にした。

「新戸先輩」

もつ少しで職員室と言うところで千穂が口を開いた。

「千穂も模擬店がやりたいのか？」

「そうではありません」

「じゃあ何だ？」

「この前のアドバイス、ありがとうございます」

「そうか、そりゃよかった」

「そうです」

千穂がそうですと言った後に何の事だったかようやく思い出したりする。最近忘れっぽくていけないな。

そのまま職員室の方へと歩いて行こうとすると千穂が立ち止まっている。

「ん？どうしたんだ？」

「新戸先輩は女子からのお願いされるのは嬉しいんですか？」

「まあ、それなりに嬉しいぜ」

本当は凄くうれしい。うれしいけど、ここで犬みたいに尻尾振って頷いたら馬鹿以外の何物でもないだろうな。

「そうですか」

「ああ」

「では、そろそろ行きましょうか。早くしないと次の授業が始まってしまうから」

千穂を連れての話し合いは一時間程度で終わるはずだった。予定時間より一時間ぐらいかかったがなんとか許しを得て放課後、千穂と共にソフト部の元へと向かった。

「許可をもらいました。あとはあなた達がどれだけ頑張れるにかかっています」

「ありがとうございます。これも生徒会長さんのおかげです」

一同綺麗に並んで俺と千穂に頭を下げている。こういうのを見ると生徒会長をしていてよかったなと思うね……いや、これがいがぐり頭の野球部連中だったらさっさと帰っていた事だろうな。

「皆さんいい笑顔していましたね」



「そうだな、ああいうのを見るとがんばってよかったって思うよ」  
その後は教室まで鞆を取りに行こうと思っていた。生徒会室に行くのも別にいいだろうし、湯河原さんへの連絡は明日でいい事になっている。

「新戸先輩」

「どうした？」

「話があります。こっちに来てください」

そろそろ銀杏も色づき始めるころか……まさか千穂がそんな話をするわけもないだろう。俺は千穂に手招きされるまま校舎裏へと向かったのだった。

## 第十七話：生徒会長通常業務（後書き）

久しぶりにあとがきを書いている気がします。さて、あと数話で終わりですかね。二十前後で終了ってところでしょう。今回の奴もかなり反省点が多い結果となったのが残念ですが、読んでくださった読者の方々、ありがとうございました。

## 第十八話：結論を出す苦しみ

### 第十八話

目玉焼きには何をかけるか？素か、ソースか、しょうゆか、マヨネーズかケチャップかその他諸々人によって違う物をかけるもんだ。ちなみに俺は醤油だ。これはやはり親の行動を見てまねたものと言っ  
ていいだろう。

「ちよつと、兄貴？」

「ん？どうした？」

「お皿から醤油がこぼれてるよっ」

「え……ああ。そうだな」

テーブルを醤油色に染め上げていたのだから一っとしながらテーブルを拭く。

「これでいいな」

「今度はお味噌汁こぼしてるよっ」

愛夏の指差す先には豆腐が転がっていた。

「あ……悪い」

拭いていた時に当たったのだろう。こぼれたみそ汁も拭きとる。すでに布巾からは様々なにおいをかき取る事が出来る。

「どうしたの？」

「何が？」

「ご飯を口に運ぶ俺をジト目で見てくる。」

「ぼーっとしてさ」

「別にしないぜ」

「でもお箸が逆さまだし左手でお箸握ってるよ？やっぱりぼーっとしてるって」

「……ああ。文化祭があるんだよ。俺の通っている高校がな、明日文化祭なの。それで、俺生徒会長やってるから大変なの」

「愛夏も通ってるし、あさってが文化祭だよ？」

「……………ああ、そうだ……………」

俺の顔面に鋭いストリートが飛んできた。茶碗、箸をその場に落としてしまう（落とした物は全てスタッフが美味しく頂きました）。

「あ、愛夏あ…痛いだろ」

「愛のムチだよっ」

「俺はMっ気ねえよ。どっちかと言うと攻める方が好きだ」

「いつでも攻めてきてよ……………あのさ、何かあったの？」

愛夏にそう言われて俺は一瞬押し黙った。

「何もなかったよ」

「嘘だよ。だって顔に『何かありました』って書いてあるもん」

「嘘つけよ。顔にはお前の拳跡が残ってるだけだよ」

本当は色々あったんだよ。千穂に校舎裏に呼び出されて『新戸先輩の事がおそらく好きです。でも、よくわかりません。あとこれを読んでください』とか言われた。おそろくって何だよ。

渡された手紙の差出人は紗枝。内容は文化祭の時に来るから文化祭が終わったら屋上に来てほしいといったものだ。

「私は、文化祭が終わったら校門前で待ってます。来てください」

そいつって帰って行ったのだ。

さて、これはどういう事だろうか？

どういう事なんだろうな。

どうすればいいんだろうな、俺。

そして、どうなるんだろう。

「なるほど、そういう事があったんだね」

「あ？説明してないだろ」

「今一生懸命説明してたじゃん。本当に大丈夫？」

「大丈夫だよ」

その心の底から心配したような顔はやめてくれ。

「で、どうするの？」

「どうするのって愛夏、そりやお前……………」

紗枝か？殆ど一緒にいなかった。でも凄く相性いい気がしてなら

ない。性格も一見するとつんつんしてそんな感じだが、実際は素直で可愛い。

「千穂ちゃんさ、中学の頃から兄貴の事好きだったのかも。一度兄貴に怒られたって見たことないような顔して泣いてたし、転校しても手紙送ってくるぐらいだからねー。兄貴ってばそんな一途な子を捨てるんだ」

「お前は どうしてそういうこと言うかなー。っーか、捨てるって何だよ」

千穂……ねえ。うーむ、ひいき目なしに見てまあ、可愛いけど長く一緒にいたからなあ……。ああ、悪いところばかり考えちゃうぜ  
「一緒にいたから全部知ってるって？うっそお、まだ裸も見えてないじゃないのさ」

「あのなあ……」

「冗談だよ、冗談」

嘘つけよ、その第三者の立ち位置は凄くおいしい立ち位置ですつて言う顔はやめろよ。

「文化祭まで兄貴は苦しみ続けるんだね？」

「にやにやしながらいうなよ」

「ごめんね兄貴」

「だから心底嬉しそうな顔をするな……いや、さあ、なんだかおかしくないか？もしかしてこれはあの千穂が普段俺からこき使われているからささやかな仕返しなんじゃないかって思っちゃう」

小悪魔的な笑顔の千穂が策略に堕ちた俺を見ている姿が目には浮かぶ。

「それはないよ。あの千穂ちゃんだよ？」

「……冗談だよ。わかってるよ」

紗枝か、千穂か、それとも逃亡か……。逃亡？いつその事この町から逃げちまうか。嫌待て待て、これは両方選ばないって言う手もあるんじゃないか？

「あのさ、兄貴」

「どうした、妹よ？」

「曖昧な答えが一番駄目だよ。傷つくよ」

「それは安心してくれ。俺はちゃんとして結果を出して見せる」

「そっか、安心したよ」

じゃあ今日早いからもう行くねと愛夏は先に行ってしまった。愛夏にああいった手前、結果は出さなくてはいけない。

「うー……やっぱり逃亡か？」

あの場所ですっぱり結果を求めていたらこんなに苦しむことはなかっただろう。まさか猶予を与えてくれるとは思わなんだ。

「うあーどうすりゃいいんだよっ」

俺の声は誰もいない家の中に響くだけだった。

## 第十九話：文化祭

### 第十九話

文化祭一日前もずっと悩んで過ごした。千穂は俺と普通に接し、俺も表面上は普通に接していたけど心の中では何か言われるのではないかと気が気でなかった。

そして文化祭当日を迎えた。生徒会長が文化祭中にやることなんて殆どあるわけもなくとりあえず午前中：つまりは予定されていた学校側のプログラムはすべて終了となった。あとは放課後扱いとなるが、これから行動を起こす者たちもいるのだ。

前日に模擬店を出したいと言ってきたグループが数組あり、その内三組だけに特別許可を出した。他は論外。何も考えていないただ騒ぎたいだけの連中が行おうとしただけの物だったからだ。

見周りと連絡を兼ねて模擬店の方へ行くため千穂連れて行くことにした。生徒会室にいますって向かってみるも、そこにはいちゃいちゃしている二人組しかない。他の生徒会のメンバーも何処かに行ったようだ。

「千穂がどこに行ったのか知らねえか？」

「もう待ち合わせ場所に行ったんじゃないですかね」

中州のその言葉についたじろいでしまう。

「ふうたるーのこと、待ってると思うよ」

「そう…か」

まだ仕事は残ってるんだけどな。これでは仕方がない。この二人にうまくいつているかどうか見てきてほしいと頼むのも危ない気がした。

「もし千穂が戻ってきたら終わりの時間は夕方ってちゃんと伝えておいてくれよ」

「わかりました」

「いつてらっしゃーい」

さつさどこかに行ってくればいいのになあという二人の視線に別れを告げて店がどういった状況なのか見に行くことにした。

曲がり角を曲がったところで何処かで見たことのある女生徒と出会った。

「おや、新戸さんではないですか」

「湯河原さん……来てたんですか？」

「模擬店の件についてそちらの生徒さんから相談を受けましてね。うまくいっているのかどうか見に来たのもあります」

「そうですか。ちょうどこれから俺も様子を見に行くところだったんですよ」

「では一緒に行きましょうか」

湯河原さんの話によるとあちらの生徒さんも結構来ているそうで（見るところなんて無いと思うが）何故だかこっちの囲碁部や将棋部を軒並み倒しているそうである。

露店の一つが見えてきたところで湯河原さんは思いだしたと言わんばかりにある言葉を口にするのだった。

「待っているって言っていましたよ」

「……誰がでしょう？」

「えーと、前生徒会長が」

「そうですか」

「はい」

いつか見た紗枝の横顔が頭の中で構築されていく。そして同時に千穂が校門に背を預けているところも想像出来た。

こんなのなら文化祭を楽しめるわけもない。

「文化祭、ちゃんと楽しんでますか？」

「……はは、生徒会長ですからそうもいきませんよ」

「期限が今日までみたいですから大変なんですね。あれなら模擬店の方一人で周っておきましょうか」

提案した湯河原さんに俺は首を振る。

「いや、大丈夫です。こっちは生徒会長の仕事ですから」



私事と仕事を一緒にするのはよくない。とはいえ、早く終わらせたいのも事実だ。一つ目の模擬店はソフト部のみんながやっているものでこれは全然問題ない。盛況だったし、許可をしてくれてありがとうと喜ばれた。

「次はたこ焼き屋ですね」

「そうです」

ここはもう本格的と言うか、駐車場にたこ焼きの焼ける車を持ってきており『〵〵監修』とまで銘打たれていた。何でも父親が以前やっていたたこ焼き屋の屋台をそのまま持って来たそうである。

「すごいですね」

「確かに…」

「あそこの禿げた人が監修してるんでしょうけど、あの生徒さんも頭にねじり鉢巻きが似合ってますね」

「娘だそうですねからたこ焼きやってたんでしょう」

ここも裏方のスタッフに徹している生徒に聞くと結構いい売り上げのようだ。どこも問題ないとのことである。実際もらって食べてみると普通においしかった。

問題があつたのは次の店舗だった。

「あの黒い固まり、何でしょう」

湯河原さんの質問に対して俺は手持ちのパンフレットを覗きこむ仕草をする。

「……資料によると焼きそば屋です」

「繁盛していませんね」

「ですね」

近づいて話を聞いてみることにした。

「どうしたんですか？」

「じ、実は…今日料理担当だった子が全員腹痛で休んじゃって…誰も作った事ないんですけどやきそばくらい大丈夫だってやったらこうなってしまうたんです」

泣きながらそう言うてくるのは一年生のどっかで見た眼鏡君。

「そうですか、それじゃあもう諦めるしかないですね」

「はい…」

料理担当の子が腹痛で休んでしまっているのでは駄目だろうな。  
集団食中毒か何かだろうか…。

「じゃあ看板下ろして、休んでてください」

「待ってください」

「湯河原さん？」

「私がやります」

上着を脱ぎ捨て、鉢巻きを装着。眼鏡君のエプロンを奪い去って  
自分に付けた……結構似合っている。

「いいんですか？」

「はい、私に任せてください」

当然、その場にいる他の生徒は困惑している。とりあえず安心させる  
為に嘘をつくことにした。

「えーと、この人は女子高の生徒会長さんで……料理がすごくうまい  
から安心してもらって構いません」

「後の事は任せて、次の模擬店に行ってください。紗枝さん、待た  
せると怖いですから出来るだけ早くに会いに行つてあげてください」  
「わかりました」

ちよつとだけ託して大丈夫だろうかと思つたけど、彼女のやる気  
を見る限り大丈夫そうだった。俺は彼女の言うとおり最後の模擬店  
へと向かい、後日諸経費をまとめた紙を生徒会室に持ってくるよう  
言つてその日の生徒会長としての仕事を終えた。

午後の分も夕方になって終わりを告げた。

結局決める事の出来ないまま、俺はこの時間を迎えたのである。

## 第二十話：終わり

### 第二十話

（『このような形で手紙を出すことを許してほしいと思います。あの時、貴女が一方的に約束を取り付けて指定した場所へ私は行きませんでした。正確にはいけませんでした。知つての通り、私はあの日階段から足を滑らせて頭を強く打ってしまいました。この手紙を書いている時点でもまだ病院のベッドの中にいる状態です。』

病院の場所は残念ながら教えられません。貴女の事でしょうかから教えたらすぐに来てくれるでしょう。退院はすぐに出来ますから安心してください。本音は恥ずかしいだけ、面と向かつて会うことが出来ない私を許してください。メールで送ればいい程度の内容ですが、メールだとあつという間に貴女に文が届いてしまいます。それでは何だか味気ないので手紙を送りました。退院したら私はずっとあの場所で待っています。改めて彼女になってほしいって伝えます』

「……こんなもんか」

大事な勝負事のようにパンツをはいて行くのを忘れるような心境である。あの時、焦って階段から転げ落ちてしまうなんて俺らしくもない……。

「ジューズ買ってきたよ、兄貴」

「おう、悪いな。帰るときこの手紙をポストに投函してきてくれ」  
手紙を差し出すと愛夏は妙に嬉しそうな顔をしていた。

「ちやーんと覚えてたんだね」

「そりゃそうだろ。忘れることなんて出来ねえよ」

「ふーん…意識戻った時は完全に記憶失ってたじゃん。おばさんとか愛夏、泣いたんだからね？」

「しょうがないだろ」

「ま、兄貴がいつのままでよかったよ。また明日退院する時に来るから」

「おう」

愛夏もいなくなつて静かになる。そろそろ面会時間も終わりを迎えるのだらう。しかし、病院とは本当に退屈なところだ。

「今寝たら夜眠れなくなるもんなあ」

枕に頭をのせて真つ白な天井を見上げる。外からは車の通る音が聞こえてきて、廊下の方では人の歩く音が近づいてくる。

病室と廊下をつなげる引き戸が開けられ、そこには先ほど手紙を出した人物が立っていた。

「……え？どうして分かつたんだよ……ああ、そうか、愛夏の奴か……」

普段気を利かせない癖でこういうときだけはお節介である。来てしまったのは仕方がない。俺は手招きをして座るように促した。

「ま、見ての通り俺は元気だよ」

「……」

相手は無言のまま手紙の中を開けて最後の一文を指差している。身体が熱くなつてきてどうしようもない。心なしか相手の顔も赤かった。

「……えつとだな、俺は……その、彼氏になりたいんだ。何日、何カ月、何年かは分らない。こつぴどく振られるかもしれないけど……俺は……」

個室だったからよかったものを……俺は病室で思い切り相手の名前を叫んで告白したのだ。一生忘れられない嫌でもあり、嬉しい思い出になる事だらう。）

「だったら……こんな感じだったら俺は大丈夫だと思うんだっ」

俺は天高く腕を突き上げてそういった。

「保健室で騒ぐんじゃないよ、ボケ」

「……すみません」

保健室の先生に怒られてしまった。

そんな俺を呆れた様子でよっつの目が見ていたりする。

「それで風太郎……」

「先輩はどっちに決めたんでしょう？」

階段から落ちたには落ちた。落ちたけどそんなに重傷じゃなかった。それでも俺の叫び声を紗枝と千穂が聞いたらしく同時にやってきた。そして保健室に連れてきてくれたのだ。

「早く答えてくださいます？」

「待たせないで下さい」

詰め寄られては逃げることもなんて男らしくないから出来ない。そもそも、足が痛いから逃げようとしても逃げられない。

私に翼があつたなら、私は飛んで逃げただろう。

「あの、新戸先輩」

いつものように落ち着き払った千穂がしっかりと目を合わせてくる。

「……大久保紗枝さんは遠いところからこうやって来てくれているんです。だから、先輩がちゃんと答えないとあっちで泣けません」

「千穂さん？それはわたくしの事を風太郎が選ばないと言言葉に聞こえますわよ？」

「そうです」

「まあ、あなたの言葉なんて構いませんわ。あちらで泣く必要なんてありませんの。この文化祭が終わったらわたくしはこっちの生徒ですもの」

高笑いがよく似合うのな。それこそどうでもいいか……。

「風太郎」

「はい、なんでしょうか」

「早く千穂さんにびしつと引導を渡して差し上げて」

「先輩は優柔不断なところがありますから言えませんよ」

全くその通りである。口をつぐんでついでに耳も閉じている状態だ。しかし、このまま無駄な時間を続けていても仕方がない。俺はこの時がやってきたかと手を叩いた。

「聞いてくれ、決断した」

「……」

「……」

言い争っていた二人は静かになって俺の方を見た。

しかしね、世の中には絶対に残んじやいけない選択肢っていうものがあるようで俺は見事にそれを選んだようだった。選択肢を選んだ三十秒後、俺の両頬には天使の翼のごとき立派な手形が付けられた。

「いやー……いい音したわ。見ていたあたしもすつきりした」

「……やっぱり三人で仲良くしようはまずかったか」

明日にでも二人に謝ろう。今度言うときはこうやって逃げない様に決めないといけない。手紙で送ったら喜んでくれるだろうか。

く終く

## 第二十話：終わり（後書き）

終わります。ここまで読んでくれてありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2225y/>

---

世界の窓が全開ですよ

2012年1月14日22時26分発行